
九の末裔 ～春眠～

日向あおい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

九の末裔　　～春眠～

【Nコード】

N1840N

【作者名】

日向あおい

【あらすじ】

ゆずるの妹が、眠ったまま目を覚まさない。

どうやら夢に住み着く悪魔『夢魔』のしわざらしい。このままでは妹が悪魔に喰われてしまう。

妹を助けるため、ゆずると、そしてなぜか直久は、意を決して彼女の夢の中へと飛び込んでいく。

《妖狼を先祖に持つ高校生陰陽師のホラー&ファンタジックコメデ
イ(?)》
》

プロローグ（前書き）

本作品は『九の末裔　　寒椿』の続編となっていますが、本作品からでも問題なく楽しんでいただけるよう執筆しています。本作がお気に召しましたら、『寒椿』の方もご覧頂けると幸いです。

プロローグ

プロローグ

———……。――

誰かに名前を呼ばれたような気がした。
少女は足を止め、ゆっくり後ろを振り返る。

「……」

誰もいない。

小首を傾げながら、前方に向き直った。

（気のせいかな）

正直、少女はそれどころではなかった。

西の空で、燃えるように赤く染まった太陽を睨みつけながら、少女は再び足を進める。

今日は、小学校の帰りに、初めてできた友達の家にお呼ばれして、遅くなってしまっていた。

（急がなきゃ！ 日が沈んじゃう！）

自然と早足になる。

と、その時。

———おい……。

再び少女の足が止まる。

やっぱり聞こえた。自分と呼んでいる。

「……………」

嫌な予感がした。

それでも、勇気を出して、今度は勢いよく振り返った。右に左に首をひねり、素早く視線を動かして、声の主を探した。

少女の視線が、道路の端の一点にたどりついた瞬間、赤や白、緑に黄色のカラフルな色が少女の網膜に飛び込んできた。

(……なんだろう?)

無造作に道路の上に捨てられているソレが、気になって仕方がない。

思わず、そっちの方へ足を動かそうとした時、少女の脳裏に大好きな兄の顔が浮かんだ。

『いいか。知らない人に付いて行ったり、得体の知らないものに近寄ったりしちゃだめだ。誰かに呼ばれているような気がした時は、ダッシュで逃げろ。無視していい。全力で家まで帰れ。いいな』

(そうだ、ダッシュで逃げなきゃ!!)

少女はくると、華麗に踵を返し、一目散に走りだした。

背中のランドセルが、ガタガタと音を立てて左右に大きく揺れた。その音にまぎれて、声が追ってくる。

————おい……。

心なしか、声は大きくなっている気がする。

ついてきている。

何か、得体の知れないものが。

ヒトでない何かが!!

そう思った瞬間、背筋が凍りつくような恐怖を感じた。足が震えだして、上手く走れない。

————おい……。

ドキリとした。

すぐ背後にいるかのように、声は大きくしつかりとしたものだった。

このままじゃ追いつかれてしまう。

少女は全力疾走に切り替えた。

すぐに息が上がる。

足がもつれて、転びそうになりながら、必死で走った。

もうすぐ家だ。

大丈夫、このまま走って家に飛び込めば、兄が何とかしてくれる。それでも、どんどん近づいてくる気配に比例して、恐怖は増大していく。

怖い。

怖い、怖いよ！！

助けて、お兄さま！！

家が見えた。

もうちよつと。

もうちよつと。

体力も限界だ。

息が苦しい。

横腹が痛い。

あと数歩。

もうすぐ、兄のもとへ。一番安全な、兄のそばにたどり着く。

喜びと安堵から、心が逸り、少女は思わず叫んだ。

「お兄さま——っ！！」

少女が手を伸ばし家門にその小さな指が触れる、まさにその時。

——ねえ。僕と遊ぼうよ。

何かが少女の肩にズシリとのしかかった。同時に、少女の心臓は跳ね上がり、全身を恐怖の波が襲う。

ゆっくりと少女は、自分の肩に視線を動かした。
手だ。

白い手袋をはめた小さな手。

でもヒトじゃない。ヒトに似ているけど何か違う。体温も柔らかさも感じない。……そうだ、人形の手だ。
後ろを振り返りたい衝動に駆られる。

『絶対に振り返ったら駄目だ。とり憑かれるぞ！』

再び、兄の声が聞こえた気がした。

でももう遅い。

少女の目はしっかり捉えていた。

宙に浮く、ピエロの姿を——。

1 アナログVS非科学

1 アナログVS非科学

「結局、誰も来なかったわけ？　じゃあ、ほんとにラブレターだったのかなあ？」

かずひさ
和久が地球最大の珍事を耳にしたような表情で、聞き返してきた。
「だからさく、なんで信じないかねえ。このイケメンな俺がラブレターもらったら、そんなに可笑しいってか？」

なおひさ
直久はがっくりと肩を落とした。

ことの始まりは、登校直後のことだった。

いつものように、始業チャイムぎりぎりに登校した直久の机の中に、差出人不明の封筒が入っていたのだ。

文面は以下の通り。

——『裏庭にて待つ』

誰もが口ぐちに言った。

「果たし状か？」

「だって裏庭だぞ？　絶対集団リンチだ」

「お前、そんなに金に困ってたのか？　誰にいくら借りたんだ？」

「ていうか、この字、達筆すぎねえ？」

「確かに、これは明らかに筆だな。炭だぜ、墨汁だぜ」

「いや筆ペンかもしれないよ」

「どっちにしても、やっぱ果たし状か？」

「果たし状だろう」

「いや、老人ホームの婆さんからのラブレターかもよ？」

クラスメイトたちは、真剣に、本気で、直久を心配した。この真剣さが余計に直久を憤慨させたのは言うまでもない。

即座に、直久は隣のクラスに駆け込み、双子の弟、和久の姿を探し出すと、大声で叫んだ。

「カズっ！！俺、ラブレターもらった！！」

こうして、瞬く間に、学年中にこの話は広まった。

そうなれば、当然、今日の放課後の、この珍事を見のがす手はない。多くの者が固唾を飲んで、裏庭に現れるだろう手紙の差出し人が来るのを待った。

しかし、誰も現れない。

それもそうだ。ここで現れたら、いい晒し者。直久と一括りにされ、一生ネタにされるのは間違いない。

かくして、待ちぼうけをくらった直久は、ふてくされながら弟の部活に顔を出し、愚痴りに来たというわけである。

そんな兄をさすがに不憫に思ったのか、和久は、ごめんごめんと笑いながら続けた。

「今時、ラブレターなんて出すヒトいるんだなあ、と思って。普通、メールとかじゃないの？」

「しょうがねえだろう。俺、携帯持ってないんだから」

「あ、そうか。我が家には携帯は必要ないから忘れていたよ」

「たく、なんて家族だ。不便でしかたないね」

直久が独りごちると、弟がくすりと笑った。

直久たちの家族は、電波やケーブルを介することなく、長距離通信つまりテレパシーが使える、一風変わった、いや、とんでもなく変わった家族だった。家族だけではない、一族そろって、携帯を必要としない。携帯どころか、交通機関も必要としない親戚も多数いる。つまり、普通ではないのである。色々な面で。

ただし、直久以外の家族に限る。直久だけは、“普通”であった。だから、このデジタルな世の中の流れに逆らって、アナログな世

界で生きる不自由な生活を一人だけ余儀なくされている、実に不憫な高校2年生だった。

「ていうか、まだ帰らないわけ？」

直久はそつと横目で弟を盗み見た。

弟は、珍しく眉を吊り上げ、きりつとした表情で弦を引いた。

ぎりぎりとは弦の軋む音が、弓道場に響く。

周りを見回せば、そんな弟の横顔に見惚れ、目をハートにさせている女子弓道部員があちらこちらに居た。その気持ちもわからないではない。

直久と和久には、一卵性の双子とはいえ、良く見るとそれぞれに特徴がある。

バスケット部に在籍し、日々駆けずり回っている直久は、このところの筋トレ効果も助けて、ぐんぐんと筋肉質になっていた。対して和久は、相変わらず線が細く、儂げな印象を与える。

今だって、実に弓道着が似合う。爽やかで、力弱そうな印象が、女性生徒たちには大人気なようで、影で『弓道王子』なんて呼ばれているとか、いないとか。

空気を引き裂くような音とともに、矢が的をめがけて放たれる。一秒後、矢は吸いこまれるようにして、的中した。

「……………ちよつとずれちゃった」

そう呟いた和久だったが、直久からすれば、矢は的のど真ん中に突き刺さっているようにしか見えない。

まったく、どんな視力をしているんだ。

直久が小さくため息をついた時だった。

和久の背中に、一瞬の緊張が走った。弓道場の誰もが気がつかない小さな動きだったが、直久にはそれで十分だった。

「何があった？ 緊急か？」

和久は、流れるような動きで弓を片づけ始める。

「ゆずるの式神からだ」

「ゆずるの？」

「ゆずるが呼んでる。急いで帰る支度をして。瞬間移動で帰るから」
小声で言いながら、和久は男子便所に大股で向かう。

「わかった。荷物取ってくる」

「うん、よろしく。僕は先に行くね。あとから来てよ」

「ああ……」

返事をしてから、はたと気がつく。

「えっ!?! あ、ちょっと待てっ!?!」

慌てて弟を引き止めようと、男子便所に駆け込んだ。だが、時はすでに遅し。

眩しい光を放ちながら、弟は別の場所へと瞬間移動した後だった。
「おい……おいてっちゃうし。ていうか、どこに行けばいいわけ?」

少しはアナログ生活の苦勞を、いや、普通の人間の苦勞を味あわせてやりたい。直久は深く深くため息をついた。

アナログVS非科学（2）



「……いつから？」

ゆずるは苦々しい表情で、ベッドの上で静かに寝息を立てる少女を見下ろしていた。いくら呼んでも、揺すっても、起きる気配がない。

「十七時半頃かしら……」

そう答えたのは、三十代半とはいえ、まだまだ少女のような印象を残す美しい女性だった。娘を心配した青ざめた表情は、よりいっそう彼女の儚さを強調する。

「だから、あれほど日没までに家に帰れと言ったんだ」

ゆずるは忌々しそうに言った。

「ごめんなさい。今日は友達の家に行って帰ると言って聞かなくて。誕生日パーティーにお呼ばれて……でも、やっぱり止めるべきだったわね……」

「あなたを責めているわけではありませんよ、母さん。ただ、この娘は他とは違うんだ。それを、自分で自覚しないからこうなるんだ」
「……でも、この娘はまだ六歳よ。それなのに自己責任だと言われ
ても、理解できるわけないわ」

「母さん」

ゆずるはオロオロと嘆くばかりの母をまっすぐに見つめた。

「妖怪たちに、“幼い”なんていう理由は通じない。弱い者は強いものに狩られる。それが自然の摂理だ。今日はまだいい。こうして
優香^{ゆうか}は、“生きて”帰ってこれた。たとえ意識がなくてもね。だけ

ど次は分からない。自分の身は自分で守らないと、髪の毛一本、この世に残らない。あとかたも無く食べられてしまう。そんな弱肉強食の中に俺たちは生きているんだ」

最悪の事態を想像し、ますます青ざめた顔で、へなへなとその場に崩れ落ちる母親の姿を、ゆずるは冷めた気持ちで見下ろした。

きれいごとを言うつもりはない。

自分たち血族は確かに、身を守る力を持ち合わせていた。

たいていの妖怪や霊、悪魔ならば、一瞬で吹き飛ばすなんてことは朝飯前だ。そもそも、ほとんどは、自分たちの周りに張られた目に見えない結界によって、近寄ることもできないし、己の弱さを知っている少しの賢さを持ち合わせたモノならば、自ら逃げていく。

だが、いくら自分に、人並み外れた破魔、除霊の力を持っていたとしても、その力を簡単に凌駕する敵はいくらでもいる。

ヤツラは、虎視眈眈と機会を狙う。

独りになった時。

力が弱まっている時。

その心に影が見えた時――。

無防備な姿をさらせば、すぐさま入り込んでくる。それとは悟られることなく、いつの間にか餌食になってしまうのだ。

我先に、我先にと。

ヤツラは群がってくる。

それほどに、一族が狙われるのには理由があった。

ヤツラにとって、ゆずるたち一族の血肉は、御馳走。ヒトという高級料理の中でも、強大な力を閉じ込めたその小さな肉体は、珍味中の珍味。それに食べれば、強力な霊力も手に入る。魔物や妖怪たちの長い一生の中で、出会うことが奇跡とすら囁かれるほどの、一石三鳥というべき代物だった。

ゆずる自身も、いつ命を落とすか分からない、そんな綱渡りな毎日だった。

妹の優香は、なお悪い状況下にある。

一族の能力は、母親の胎内にいる時から発揮される。だが、その力を使いこなせるようになるには、訓練が必要とされた。だから、物心つく前から一族の子供たちは、大切にそして厳しく、能力の使い方を養成されていく。

力の使い方が安定しない幼子が、一族の敷地を出ることは、自殺行為に等しい。内なる能力が強ければ強いほど、ヤツラの餌食とされるのだから。

それなのに、日本では、六歳という養成途中のもっとも不安定な時期に、義務教育なる名目で、外の世界へ強制的に送り出さねばならない。

子供たちは、一族の当主による強力な結界を身にまとい、登校せざるを得ない。

今、ゆずるの目の前にいる妹の優香もそんな子供の一人だった。だが、いくら結界を張っても、気休め程度にしかないのは、一族の誰もが知っていた。わかっているのだ。こうして、結界をいとも簡単にすり抜けたヤツラによって命を落とす子供は、今までだって何人もいたのだから。

自らの身は、自らで守るしか、すべはない。

いつも、神経をとがらせ、心に隙を作らず……強くあるしかない。

そうやって自分は生きてきた。

だから、生き残ってこれた。

（だから、あれほど、日が暮れる前に家に帰れと言ったんだ。ヤツラの力が弱まっている昼間のうちに……）

ゆずるは、静かに寝息を立てる妹の額にそっと触れた。その厳しい目の奥に、かすかに愛おしさが見え隠れしていた。

ゆずるが、唯一、心安らげる存在。
可愛い、いい——妹。

ゆずるの持っていないものを全て持って生まれ、彼女が望むものは何でも与えられ、誰からも可愛がられて育った——たった一人の妹。

「待ってろ。俺が必ず助けてやる」

ゆずるは、妹の額を撫でながらそう言うと、眩しそうに目を細め、優しい笑顔になった。



「ゆずる……優香ちゃんは……」

優香の部屋の外へ出ると、ゆずるは優しげな面持ちの少年に出迎えられた。いとこの双子の片割れ、弟の和久だ。かずひさ

「たぶん夢魔だ」

「夢魔……西洋の悪魔だね。僕は、西洋系にはあんまり詳しくないからなあ……」

「ちゃんと調べてみないと、確かなことは言えないさ。違うかもしれないし、退治法もわからない」

「そうか……じゃあ、本家に行かないとね」

「そうだな。……直を呼んでくれ」

「直ちゃんを？」

まるで珍しいものでも見た、とでも言いたげに、和久が目丸くして覗き込んできた。その視線から逃れるように、ずっと背を向け

る。

「いつもは、邪魔だっついて呼ばないじゃない」

ニヤニヤと、含みのある笑みまで浮かべている。

「くだらないことを言うな。今は猫の手も借りたい。時間が惜しい。先にいくぞ」

五秒後、二つの人影が一瞬にして消えた。

2 猫の手というか

2 猫の手というか

「やっと来たか」

直久は小さくため息をついた。

自宅のリビングにある、直久お気に入りソファにごろりと横になりながらテレビを見ている最中に、その視界をちらちらと横切るソレに向かつての一言だった。

「たく、遅いつつーの」

空中に浮きつつ、ヒラヒラとこれ見よがしに往来する白い紙。双子の弟にして、先ほど自分を置き去りにしてどっかに飛んで行った薄情な和久がよこした伝言である。目に見えて、しかも、実体化してしまった、いわば携帯メールみたいなものだろうか。ただし、和久からの送りつけられる一方で、直久から発信することはおろか、返信することもできない。仕方がない、直久は一族唯一の“無能”である。タダレト

つまり、これは和久だけではなく一族の能力者ならば、誰もが行える簡単な術で、遠く離れた相手にメッセージを送る時、平安の大き昔から使われた方法だそうだ。

常々、直久は、不条理、理不尽、横暴、不公平の代名詞というべき代物だと、抗議してきたが、もちろん能力者どもは取り合ってくれない。

だったら、文明の利器たる『携帯電話』をと、声高に言っても、すでに嫁いだくせにちよくちよく実家に戻ってきては夕飯をかつ喰

らって帰っていく実姉に「勝手に持てば？」と切り捨てられる始末。独りで携帯を持って、誰にメールを送信せよというのだ。電波も受信してくれよ、式神さん、と項垂れるしかない。

直久は、その一方的なメールを掴みとり、まじまじと読み始めた。

——『本家にて待つ』

「……なんか……どっかで見た文章だな……なんだっけ……」

自称、『世紀の逸材の脳』、他称『残念な脳』をフル稼働させて、直久は記憶の糸をたどろうとしたが、まったく手ごたえが、無かったのですぐさま断念する。

深くは考えない。キニシナイ。

彼の最大の長所であり、致命的な短所であった。

「とりあえず、本家だな。あんまし行きたくないけど、まーしょうがない。来いと言われればいきますよ。ええ、紙切れ一枚で呼びだされても、別に怒ったりしないしい。直ちゃんはイケメンだから、全然キニシナイ」

最後の方は奇妙な節が付いたが、イソイソと自室へ向かい、支度を始める。自分の学習机の上に無造作に置かれていた、くたびれた財布をズボンの後ろポケットに突っ込み、あっという間に自宅を出た。

春先の十八時。

外はすでに真っ暗だ。

まだ肌寒い。上着を着てくれればよかった。

（まあいいか。カズが呼んでるから早く行かなきゃね）
呼んでもらえた。

それが嬉しかった。

置いていかれた時は、またカヤの外かと思った。

“無能”な自分には、何もできない。

いや違う。それでもできることはきつとある。

（なんてったて、俺ってば、イケメンの上に、運動神経バツグンだからなあ〜！）

直久の家から、本家までは、さほど距離はない。車を使えば五分ほどでたどり着くだろう。

だが、直久にとっては、実に長い長い距離に思えた。一步一步、その屋敷が大きくなっていくにつれて、くるりと踵を返したい衝動に駆られる。

なんだか頭まで痛くなってきた。

気分もどんより重苦しいし。来るんじゃないかと、何度も思った。

（もう大丈夫だと思ったんだけどなあ……）

やっぱり、この家の敷居は高い。

いや、目に見えない結界が、何重にも施されているのは、子供のころから耳にタコができるほど聞かされてきた。だが、結界なんていらんんじゃないかと思ってしまう。

（こんな陰気な所、誰だって近寄らねえって）

直久は、心の中でぼやいたが、そういう問題でもない。結界は対ヒトではなく、対妖魔なのだから。

そうこうしている間に、おごそかな神社の前にたどり着いた。

黒漆塗りされた大きな鳥居の前にある石碑には、『朝霧神社』とある。

この神社こそが、直久たち一族の本拠地ともいうべき九堂家が仕える社であった。

だが、神社とあるが祭られているのは神ではない。

一族のみぞ知る、一族の祖先。妖狼がこの神社の主である。

その境内の一角に、住居があった。直久たちが本家と呼ぶ九堂家のお屋敷であり、今まさに直久が攻略すべき場所であった。

門扉を前に、頭はますます重く、痛が激しくなった。それでも、頭を抱えながら、門をくぐり、玄関に手を伸ばした。その時。

「いてっ」

伸ばした指先に、針を突き付けられたような痛みを感じて、反射的に手を引っ込めた。

（なんだ？ 静電気か？ 冬ならわかるけど、もう春だぞ？）

訝しげに眉をひそめ、首をかしげた。が、数秒後、キノセイだないと、直久はもう一度、手を伸ばした。

——バチンッ。

今度は小さな爆発音が直久を拒んだ。

猫の手というか(2)

「何だ？」

激しい違和感を覚えて、ゆずるは本から顔を上げた。

「ナニかが結界に触れたみたい」

返された声の方に視線を送ると、いとも険しい表情で警戒をあらわにしている。

「僕が行ってくるよ、ゆずるは夢魔について調べて。そっちが優先」

和久がにこりと微笑んだ。

確かに、和久ほどの力を持っていれば、並大抵の妖魔は敵わない。現時点では、一族の中でゆずるに次ぐ力の持ち主だった。

「何かあれば、すぐに呼べよ？」

「了解」

ヒラヒラと手をふる和久を見送ると、ゆずるは再び書物に視線を落とした。

それにしても、この九堂一族の本拠地に踏み込もうとする妖が存在しようとは。

(よっぽどの大物か、ただのバカか、どっちかな……)

ゆずるの予想通り、大物でもありバカでもある直久は、玄関の前で呆然としていた。

(いや、俺ってばそんなに嫌われてるわけ？ ええ、どんだけ！？
だって孫だよ？ あのクソジジと、モウロクババアの孫でしよう？
あれ、違ったのかなあ？ いやいや、違わないでしょう！

孫、孫、孫っ！！）

まさか、玄関に行く手を阻まれようとは、思ってもみなかった。
この結界は、不出来な孫を近付けないように張られたものだった
のか？

嘘だろう？

『生きる価値なし』の文字が頭の中を、グルングルンと回転した
す。

（ま、待て、落ち着け）

そうだ。

まさか、そんなはずない。

自分が妖魔と同じ扱いを受けるわけがない。

（もう一回……やってみようよ、ねえ直ちゃん……こ、今度は大丈
夫だよ。うん、そうだ）

もはや、人格崩壊ギミな直久ではあったが、祈るように一度目を
伏せると、ゆっくりゆっくり引き戸へと手を伸ばした。

大丈夫。

自信を持て。

俺は可愛い孫だ。

自分にそう言い聞かせながら。

心なしか、指先が震えているように見えなくてもない。いや、キノ
セイか。

あと数センチで触れそうになったその時。

「あれ、直ちゃん？」

双子の弟によって、門戸はあっけなく開かれた。

完全に脱力している兄に、和久はぼかんとなった。

「何してんの？ 早く入ったら？」

「ほっといて」

「ははん、分かった！ お祖父様が出てくると思ってビビったんでしょう？」

すると、兄はその存在を忘れていた、と言わんばかりにこちらを振り返った。

「あれ、ちがうの？ 変な直ちゃん」

そう言って和久は笑った。

「大丈夫、今、お祖父様はいないよ。京都だって」

「京都？ なんでまた？」

「毎年この時期になるとお出かけになるんだよ。ほら、春だから」「春だから？」

「魔物がうじゃうじゃ出てくるから……稼ぎ時ってやつかな？」

「なんだよ、そりゃー。魔物っていうのは、蛙の親戚か？」

ふてくされたようにつぶやいた兄に、和久は、なるほど、と笑った。

「魔物は冬眠しないけどね。単に、春は人間の方が浮かれているから、付け込みやすいんだよ」

言いながら、兄を屋敷の中へと促す。

すると、兄はどういうわけか、一瞬、玄関の敷居を跨ぐのを躊躇った。

「どうしたの？」

すかさず和久が声をかけたので、はっとしたように兄は、何でもないと頭を振る。そしてゆっくりと敷居の中に足を進めた。

完全に体が玄関の中に入り込むと、兄は、小さく息を吐いた顔を見せた。明らかに、ほっとしている。

（なんか変だな……どうしたんだろう？）

不審すぎる。

でも、何がおかしいか、まではわからない。

（だいたい、さっきの違和感は何だったんだろう）

明らかに結界を犯す妖魔の存在を感じた。だが、その気配をたどって、行きついた先に居たのは兄だった。

和久は、薄黒い靄もやが漂って視界を邪魔しているような、そんな嫌な感覚に襲われる。

「ゆずるは？」

はっとなって兄を見た。兄の表情は、すでにいつもと変わらないものだった。

切り替えが早いのは長所。心配性の自分にはまねできない。

「書庫にいるよ」

なんとか取り繕って、兄に笑顔を向けた。大丈夫、兄は気が付かない。

（最近……何かがおかしい……）

兄の周りで起きる異変に。

気が付いているのは、きっと自分だけに違いない。

「行こう。ゆずるが待ってるよ。猫の手も借りたいみたいだから」

「俺は猫かよ」

「猫に失礼だね、それ」

「俺は猫以下かつ！」

今度はちゃんと笑えた、と和久は思った。

微笑み返してくれた兄に、少しだけ胸が痛んだ。

猫の手というか(3)



九堂家には、それは膨大な書物を納めた書庫がある。膨大と一言であらわすのも恐れ多いほどの書物だ。内容は全て、一族が退治してきた妖魔や悪霊に関することばかり。

そう。九堂家が代々引き継いできたものは、血筋と能力と、そして、この書物であった。

いわば、この書庫に納められた膨大な書物は、一族の歴史に等しい。いわば、一族の生命線であり、家宝であった。

ヒトよりもはるかに長寿である妖怪たちを相手にするには、こうして情報を子孫に伝えていくしか身を守るすべがないのである。

そして、この書庫には誰でも入れるわけではない。よって、一族の中では透明人間的な扱いをされる直久は、もちろん今回が初めての入庫となる。

「すっげ〜〜〜なあ〜〜〜。なんじゃこりゃっ!!」

開いた口がふさがらないとはこのことで。

「埃が入るよ、ここ、ほとんど掃除してないから」

「どんだけあんだよ。何々……」

兄は、手近にあった書に目を落とすと、ぱらぱらとめくった。が、すぐさま、無理、と読書を断念したようだ。

「その辺は、一番古い時代のだから無理だよ」
からからと和久は笑いながら、続ける。

「僕でも読めないもん」

「一番古いって……」

「そう、小夜様の手だと言われているけど、本当かどうかは、ね」

「あれか！ 妖怪の娘っ！！」

兄は顔を引きつらせて、まるで汚いものでも触ったかのように、両手を払った。

「でも、僕らの御先祖様だよ……。彼女が生まれてなかったら、僕は生まれてないし」

「ってことは、俺も妖怪の子孫かつ！！」

「……何をいまさら……」

「いや、読者を代表して発言してみました」

「読者？ 何言ってるの？」

「いえ、こちらの話デス」

和久たち一族の子供たちは、物心がつく頃から、能力の使い方と同時に教え込まれてきたことがあった。それが、この小夜という娘の話である。

今からさかのぼること千百年。一人の少女から九堂一族の歴史は始まる。

彼女の名は小夜。

生まれは、平安初期の頃だと言われているが、確かな生年月日もその場所も、もはや調べるすべがない。

だが、唯一確かなことは、彼女の父のことであった。

父の名は、おおとも大伴泰成。のやすなり当時、都でもそこそ有名な陰陽師であった。

陰陽師とは、天文道・陰陽道・暦道といった学問に精通した官僚であり、吉凶を占ったり災害を祓うための祭祓を密かに執り行い、場合によっては敵対者の呪殺まで請け負うような職業であった。も

っとも有名な人物は、残念なことにあべのせいめい安部清明であらう。なぜ、残念なのかというと。

この安部清明の台頭によって、都から追い出されたのが、和久たちの祖先、大伴泰成だったからだ。

流星のごとく現れた神童、安部清明に、大伴泰成は焦ったに違い

ない。しかも、その能力たるや桁違い、いや、段違い。ヒトならぬモノの子であるという噂さえ、まことしやかに囁かれたした。

完全に幼い子供に、自分の居場所を奪われた大伴泰成は、関東に落ちた。そこで一匹の美しい妖怪と出会う。銀色に輝く毛並みを持ち、丈が人間の二倍は優にある大きな妖狼だった。

二人は恋という盟約を交わし、妖狼は一夜にして身ごもった。

十年後、妖狼は女子を出産する。そして、子の父親の言いつけ通り、『小夜』と名付けた。

その娘こそ、九堂家の一代目というわけである。

「第一、僕らのお祖母様はイタチの娘なんだよ。そんなに毛嫌いしなくてもいいじゃない？」

和久は、笑いながら兄をゆずるのもとへ案内する。

「でもさ、そんな冗談、本気にしてんのかよ。イタチの血が俺に入ってるとか、わけわかんねえし」

（ほんとなんだよな、これが）

心の中で兄に返事をし、和久は足を進めた。

二人の祖母は、イタチの妖怪を父親に持つ。これは一族では周知のことであり、このような妖怪の子供は、珍しいことではなかった。

一族はその血が薄まることを嫌った。血が薄まることで、能力が弱まることを懼れたのだ。

そのため、定期的にヒトと妖怪の混血児を設けて、その能力を維持してきた。ちょうど祖母がその時期であっただけ、というのが一族の全体の見解である。

そして、その祖母は、直久のことをひどく嫌っていた。弟の和久の目から見ても、あからさまなほどに。

それは、単純に相性が合わないからという理由ではないようだが、その本当の理由を双子が知るわけがない。だが、時折見せる祖母の視線に、恐怖が入り混じっていることを和久は感じ取っていた。

脅えているのだ。強大なイタチ妖怪の娘である祖母が、“無能”

な兄に。

いつからか、自分を毛嫌いする祖母を当然のように兄も嫌うようになり、お互いになるべく避けるようになってしまった。

が、和久には、兄よりも祖母の避け様の方が極端であるように思えてならない。

今日だって、兄が本家に近づいてくる気配を悟ったのか、祖母はいつの間にか自室の分厚い扉の中に引っこんでしまっていた。

何か自分たちには知らされていない秘密があるのではないか。

最近、和久にはそう思えて仕方がない。

二人は、天井まで届く本棚の間を、なんとかかすり抜けて書庫の奥へとたどりついた。いとこの背中が視界に入る。

「ゆずる。直ちゃんが来たよ」

一応、声をかけたが、案の定返事はない。すでに、文献に没頭しているらしい。

「それで、俺はなんでこんな紙ばかりの、ほこり臭いところに呼ばれたわけ？」

兄は、やれやれ、と言いながら、手近にある書物を数冊いっぺんに抱え上げては、床の上にドサドサと置くという動作を数回繰り返し、あっという間に腰ほどの高さに積んでしまう。

まさか、とは思って見守っていたのだが、やっぱり兄はその上に座った。

(……お祖父さまが見たら、卒倒しそうだなあ……)

ははは、と小さく笑いながら、和久は心の中でつぶやいたが、古文書学の権威だって平安初期の貴重な資料がこんな乱雑な扱いを受けていると知ったら、顔を真っ青にして悲鳴を上げるに違いない。

この書庫にある書物は平安初期から現代のものまで、まるで新品のように保存されていた。千年以上も前の古文書も、時を止めたように、当時の姿のまま現存するというだけで、学者たちは奇跡だと叫び、興奮のあまり発狂かもしれない。きっと手をふるふる震わせ

て、夢中になってページをめくり、一年は書庫から出てこないのではないだろうか。

こんな湿気の多い日本で、こんな無造作な扱いをしていたら、千年たった紙などボロボロになっていて、まともに読めないのが普通だからだ。

だが、この書庫の古文書には、劣化しないように術がかけられていた。ちよつとやそつとでは赤茶けたり、汚れたりすることはないし、破けたり、水で滲んだり、燃えたりすることもないのである。他言無用、門外不出であるのは言うまでもない。

この書庫に出入りする資格を得たものは、まず頭にたたき込めと言われていたから、和久もゆずるも、そのことは重々承知していた。でも、直久は違う。たぶん、書物の貴重さも、術がかかっていることも全く知らないし、気にも留めていないし、興味すらないのだろう。そうでなければ、このような扱いができるはずがない。兄らしいと言えば兄らしい。だから和久はあえて何も言わないことにした。

「夢魔、についての本を探してほしいんだ」

「夢魔？　なんだそりゃ。あ、わかった。夢を食う、カバみたいな――」

「それはバク。夢魔は魔物」

「わ、分かってたよ。分かっててわざとボケたんじゃん。やだわ、和くんたらゝ、ほほほ」

「さ、手を動かして。『夢魔』または『ナイトメア』、それから『夢』に関する情報を何でもいいからピックアップしてね」

「へいへい」

面倒くさそうに、兄が書物に目を落とすのを見届けると、和久も情報収集を始めた。

猫の手というか(4)

「で、夢魔がなんだったんだ？」

「優香ちゃんが、眠ったまま目を覚まさないんだ」

「優香ちゃん……？」

眉をひそめ、和久は本から顔を上げると、兄を睨む。

「まさか、誰だっけ？ とか言わないでよ」

「い、い、言わないよ！ あれだろ、ほら、えっと。ど忘れだ」

はっはっはと笑い飛ばしてやり過ごそうとしている兄に、小さくため息をつく、和久は本に視線を戻して、ぼそりとつぶやいた。

「……僕らの妹だよ」

と、1テンポも2テンポも遅れて、兄の絶叫が書庫を揺らした。

「……なわけないでしょ」

「だ、だよな。びっくりした。マジでびっくりした。あのオヤジどもが、俺たちの目を盗んでイチャついて、うっかり子供ができました、とかいうところを想像しちゃったじゃんか。また想像しちゃった、気持ち悪い。おえええ」

「やめてよ。僕まで想像して、気持ち悪くなってくるじゃない……もうやめようか、この話」

「そうしてそうして」

「えっと、優香ちゃんはゆずるの妹だよ」

「ああ、ゆずるのね。あのガキか」

兄は少しだけ遠い目になった。どうやら記憶の中の彼女を思い起こしているらしい。

つられて、和久も、つぶらな瞳の、少し口達者な少女を脳裏に想い描いた。

優香は、ゆずるの異父兄妹である。

ゆずるの父、圭一郎^{けいいちろう}は九堂家の長男で、祖父にとっては、将来こ

の一族を担う大切な一人息子だった。

だが、彼は、ゆずるの母親との婚約が決められていた時からすでに、別に想う女性がいた。無気力状態で、ゆずるの母と結婚したものの、その女性を諦めきれなかったようだ。妻がゆずるを身籠もつたと知るや否や、忽然と姿を消した――離婚届だけを残して。

彼としたら、自分に代わる後継者ができれば、問題ないはずだ、ということだったのかもしれない。義務は果たした、と。

当然、圭一郎は、後継者としての資格を失い、二度と九堂家並びにその分家の敷居を跨ぐことを禁じられた。破門である。

不幸なのは、ゆずるの母である。結婚後、わずか四カ月で夫に逃げられた彼女は、特に取りみだした様子もないままに、離縁に応じた。

当時、十六歳だった彼女には、言われるままに結婚し、ゆずるを身籠もり、離婚に応じる以外に、道が残されていなかったのかもしれない。

離婚後、それでも彼女は、ゆずるの母親であり続けようとしていた。両親や、ゆずるの祖父母が勧める再婚の話に頑として首を縦に振ろうとしなかった。

この先の生涯を一人で生きていくと固く決めていた彼女を説得し、再婚させたのは、十歳になったゆずるであった。

『もういいよ。僕はもう大丈夫だから。今度は母さんが、幸せになる番だ』

この一言で、彼女は初めて涙を見せた。

こうして、ゆずるの母親は再婚を決意する。

ゆずるの祖父母は、これを大いに喜んだ。これで、息子の罪滅ぼしができる、そういう気持ちも大きかったのかもしれない。二人はすぐに、彼女の再婚相手を一族から探し出した。

そして、適当とされたのが、和久たちの父親の弟にあたる人物だ

った。一見、今度もまた、本家の言うがままの結婚に見えた。だが、違うのは、この相手の男が、全てを知って、密かに彼女に思いを寄せていたことにある。そう、彼は、ゆずるの祖父母が、彼女の再婚相手を探していると聞いて、自ら声を上げたのだ。

彼の温かな愛情に包まれ、彼女に笑顔が戻った。そして、彼女の心にも、いつしか愛が芽生える。

両親ともに心から深く望まれた子どもが生まれるまで、時間はかからなかった。

それが優香だ。

だから、ゆずるの妹と言え、優香は本家の祖父母とは血が繋がっていない。

当然、本家で暮らすゆずるとは別に、和久たち大伴の姓を名乗り、別の家で暮らしている。

兄妹が会えるは、祭儀の時など特別な時か、自発的に会おうとした時のみだった。

わざわざ会いに行った時はともかく、祭儀の時の二人の距離は家と家の距離よりも遠く感じ、優香はゆずるのしゅんと伸びた背中しか見ることが叶わない。

兄は次代様、自分は単なる分家の子ども。

家と家の距離よりも、年の差よりも、その違いは果てしなく大きい。

彼女の中で、ゆずるが『憧れのお兄ちゃん』として美化されていくのは想像に易い。

対して、ゆずるも自分に笑顔を振りまく妹を、心から可愛がっていた。

もしかしたら、彼女の存在がゆずるにとって、唯一の救いになっているのではないか、と和久は思っている。

いつも、心の休まらない毎日を送るゆずるにとって、何も考えずに、心の鎧を解くことができる居場所。

憧れもあるかもしれない。

自分も、妹のように、両親に愛された子供として生まれてきたかった、と。

「あの生意気なガキなら覚えてるよ」

兄の一言で、和久は我に返る。本のページも、気がつけば進んでいない。

自分の中のもやもやした思いをごまかすように、和久は笑顔をつくり、兄の話の続きに耳をかたむけた。

「あのガキはなあ、俺に向かってバカとか抜かしやがったんだ。あん時はこゝろんなにちっちゃかったけど、今いくつになったんだ？」

言いながら兄は、指で5センチくらいの幅を作ってこちらに見せた。

「小さっ！ どこで会ったの、そんな小さな優香ちゃん」

「伯母さんの腹の中。俺がこんにちはって言ったら、『私、ゆずるお兄ちゃんのお嫁さんになるの。あなたみたいなバカとなんて、頼まれても結婚しない。あ、大変！ お兄ちゃんにバカが移るから、直久と話すなって言われてたの』とかなんとか言いやがったんだ。ありえないだろう？」

「あはは。あり得ないね」

「だろう？ こんな世紀の天才にむかって、バカとかどの面が言うってかんじじゃん？」

「え、そっち！？ ……まあいいか。優香ちゃんも、今、小学一年生だよ。随分、美人になったんだから」

「ふん。ガキには興味ないね」

（でも、僕たちのお嫁さん候補だよ。しかもかなり有力な）

和久は、兄のために、心の中だけで呟いた。

一族では、いと同じ土で婚姻を結ぶのが慣例だった。中には、いとこだという理由で、三十歳以上歳の離れた夫婦も存在するくらい

だ。十歳の歳の差など、適齡の枠におさまって余りある。

「で、あのガキが夢魔に取り憑かれたのか？」

兄が、見ていた本に飽きたのか、それをポイと後方へ放り投げた。
「十中八九ね」

可哀そうな姿で床に着したその本を拾い上げ、和久はそつと棚に戻してやりながら、話を続けた。

猫の手というか(5)

「夢魔はおおざっぱに2種類に分けられる。夢魔自身と、その夢魔が見せる夢のことを『ナイトメア』と言って、この悪魔が見せる夢は悪夢なんだ。つまり、恐怖を与える悪魔」

「ナイトメアね。なんか聞いたことあるな。たしかゲームとかに出てきた馬面なボスキャラだった気がする」

「そうかもね」

ナイトは夜、メアは古い英語で霊を意味する。だから、ナイトメアは元々『夜の霊』という意味だった。

それが、後世ではメアが牝馬を指す言葉とされるようになって、絵画とかで、炎に包まれた馬で表現されることが多くなった。だから、ゲームとかで出てくるナイトメアは馬の姿をしていることが多い。

「――実際のナイトメアが馬の姿をしているかどうかっていうのは……ちょっとね。僕もまだ会ったことがないから、分からないや。……そして、もう一方はインキュバスまたは、サツキュバスと言って、この悪魔は淫魔なんだ」

「いんま？」

兄がぼかんとした顔で首を傾げた。

「淫乱の『淫』で、悪魔の『魔』。分かる？」

「オーケー、オーケー。続けて」

「インキュバスは男性の夢魔で人間の女性を襲い、子どもを生ませる。サツキュバスは女性の夢魔で人間の男性と交わって精子を集めると言われている」

「うわっ。なんか、カズの口から、襲うとか、交わるとか、精子と言われると、エロさ倍増だな」

和久は、じたばたと悶絶し始めた兄を一瞥し、話を続ける。

「サツキュバスが集めた精子をインキュバスが人間の女性の腹に受

精させるらしいんだけど、インキュバスとサッキュバスは同じもので、時として変身して使い分けているのだとも言われているんだ。ともかく、この二つの悪魔はナイトメアと異なって快樂を与える夢魔なんだ。6歳の子どもをインキュバスが狙うとは思えないから、たぶんナイトメアだと思うけど」

「か、快樂っ！！ どあああああああ」

突然絶叫した兄に、さすがにゆずるが本から顔を上げた。

「なんだ、うるさいぞ」

「ごめん。直ちゃん、なんか妄想入っちゃってでてこない。ほっといていいよ」

「当たり前だ」

ゆずるが一冊の本を手にとって、こっちへと歩いてきた。

「何か分かったの？」

「これに少し乗っていた。前回夢魔と一族が戦ったのは、記録によると百年前だ」

「退治法は？」

「載ってない。おそらく、今、優香に取り憑いてる夢魔は、九堂の結界を容易に敗れるような強力な魔物だ。過去の戦いでも、退治までは不可能だったのかもしれない」

「なるほど……追っ払うのが精いっぱいだったんだね、きっと」

「なんだよ。案外、使えないなー、ご先祖様も」

と、何事もなかったかのように兄が会話に入ってきた。

ゆずるも和久も、ちらりと直久に視線を送ったが、すぐに話を戻す。何も暗黙の了解で、聞かなかったことにしたのだ。

「まあ、でも。夢魔だって、悪魔なんだから、いつもみたいに憑かれている人から引き離して、退治するのがベストなんじゃない？」

「そうだな。優香から引き離す読経を試してみるか」

「でもさ？」

再び兄が口をはさんだ。が、無視してゆずるは続ける。

「だが、読経にそれほど効果があるとは思えないし、別の方法を考

えた方がいいかもしれないな」

「そうだね……別の方法かぁ」

和久は、ずっと目を伏せ、腕を組んで少し考えたが、すぐに一つの方法を思いつく。

「……例えば、夢に入って、中から優香ちゃんを起こす、とか？」

「それができれば、一番確実だし、楽だな。でも、どうやって夢に入る？」

「待って、たしかそんな呪文があった気がする。昔、別件で調べものをしてた時に、書庫で見かけたよ、僕」

希望の光を見つけたことで和久の顔が、ぱーっと輝やく。そして、呪文を探そうと本に手を伸ばした時、再び直久が口を開いた。

「あのー、発言してもよろしいでしょうか」

すぐさま、ゆずるの氷のような視線に、兄は身を縮みこませることになった。

「ひ、一言だけです。どうしても気になるんで」

「なんだ。くだらなかったら、瞬間移動で富士山の頂上に吹っ飛ばすぞ」

「ひ、ひいい。そんなお代官様、殺生な」

「早く言え!!」

「いや、あのですね。さっきから拝聴していますと、何やらカタカナが飛び交ってらっしゃいますよね」

兄は、わざとらしく間をおいた。

「そんな英語圏の悪魔に、日本語の読経とか……日本語、通じるわけ？」

「……」

「……」

「……あれ、僕ってば、やっぱり富士山行き？」



「あつたよ。これだ！ 夢の中に入る呪文」

そう和久が歓喜の声を上げたのが、午後九時過ぎだった。

「それは、よかった、よかった。俺さすがにお腹すいたもん」

なんとか富士登頂を免れた直久は、ぼそりとつぶやいた。それで、和久も自分の空腹に気が付く。

見れば、和久の声にこちらへ歩み寄ってくるゆずるの顔にも、疲労が浮かんでいた。

（ここから先は夕飯の後かな……）

「呪文をこれに書きうつせ」

ゆずるから紙とペンを受け取ると、和久はさらさらと呪文を写していく。

「お、今度は俺にも読めるぞ」

和久の横から、本を覗きこんでいた兄が、声に出して読みだした。

「『夢ニ入ルニハ、夢ヲ見シ人物ノ傍ラニ立チ、其ノ者ノ耳ニ呪文ヲ囁ク』か。カタカナ、うぜえな。いつの時代の文章だよ」

「いつかなあ。明治初頭くらいだと思うけど」

和久は、そう答えながらも手を休めることはない。

眉をひそめ、さらに兄が音読を続けた。

「『ソノ時、香ヲ焚クベシ』」

「香？」

さすがの和久も顔を上げて、その一文を探した。

「ほんとだ。香を焚きながら呪文を唱えろって。あれだね、アロマテラピーみたいなものかな。香りは眠りを誘うから」

「何の香か書いてあるか？」

少し離れたところから、耳だけ傾けていたゆずるが話に加わった。

「えっと……」

「ん？」

双子の眉間に皺が寄る。

数秒の沈黙ののち、二人は顔を見つめ合わせた。ぱちくりぱちくりと、数回瞬きをしてから、再び同時に書物に目を落とす。

「ねえ、これどうしてここだけ、ひらがなで書いてあるんだろう」

「わかんねえ。めっちゃめっちゃ不自然だな」

「もしかして、書いたヒト、意味がわからなかったんじゃない？」

「だろうな。微妙に間違ってるもんな」

「まちがってるよね」

「どう考えてもアレだろ？ トイレの芳香剤でよくあるやつ」

「そうだよ、紫色の花のアレだよ」

「おいしいんだよ。ほんとおいしい。順番が間違ってるだけだもん」

「そうだね。ご先祖様的には頑張ったんだね」

「そうだよ。言いたいことは分かるから、多めに見てやれよ。俺だったら、テストで丸あげるぜ」

「ええ、バツでしょう。さすがに、意味違うし。だって絶対、香りでないよ、これ焚いても」

「確かに！ 煙くて目覚めるかも」

二人だけで盛り上がって、中々答えがかえってこないの、しびれをきらしたゆずるが再び問う。

「だから、なんて書いてあるんだよ」

再び顔を見合わせて、双子は同時にゆずるを振り返る。そしてみごとなまでのハモリを見せた。

「べらんだー」

3 ムササビか天狗か

3 ムササビか天狗か

三人は、あわただしく夕飯を取ると、すぐさま夢魔退治の準備をすることになった。ゆずると弟が、勝負服、もとい、狩衣に着替え始める。その間に、暇な直久は『べらんだー』を求めてコンビニに行け、という有無を言わさぬ命令が下ったのは致し方なかったかもしれない。弟たちは狩衣に着替えたあと、ご先祖様の加護を得るために、祈りを捧げなくてはならないので、いざ出陣するまでにはだいぶ時間がかかるのだ。

狩衣とは、平安時代の貴族の普段着で、神社の神主さんを想像するとちようどいい。二人は、破魔や除霊を行う時、この着物に着替える習慣がある。

とは言え、なんとかレンジャーやバツタのヒーローたちのように、狩衣姿に変身しないと力が発揮されない、というわけでもない。本人たちの気分らしいが、そのへんは破魔除霊の未経験者である直久には共感できない部分であった。

（まったく……行けばいいんだろう、行けば！）

一人、心の中でぼやきながら、直久は本家の門扉を引き開けた。ガラガラという音とともに、ひんやりとした外の空気が屋敷の中に入り込んでくる。

「さむっ……」

直久は、反射的に首をひっこめ、背中を丸めた。

「なんて直ちゃん可愛そうなのかしら。こんなか弱い少年を、寒空の下、お使いに出すなんて！ ううん、負けちゃだめよ、頑張れ、直ちゃん！」

へんなノリで勢いをつけると、直久は、えい、とばかりに玄関の

外へと足を踏み出した。

外は真っ暗闇。風音だけがあたりを包んでいる。

少し歩くと、淡いライトに照らされ、神社の境内や鳥居がぼんやりと浮き上がっていて、異様な薄気味悪さを漂わせていた。

直久は、なんとなく生唾を飲み込んだ。

直久の実家も『先詠神社』^{さきよみ}という、わりと大きな神社の敷地内にある。部活で夜遅くなる時は、やはり、人気のない不気味な神社の敷地内を突っ切って帰るわけだから、夜の神社にも、静けさにも、慣れているはずだった。

だが、やっぱり違う。

『朝霧神社』^{あさぎり}は別格だった。

朝霧神社の黒い一の鳥居から続く参道を、3分ほどゆっくり歩くと拝殿へとたどり着く。拝殿の横にゆずるたちの住居があり、先ほどまで三人が埃まみれになっていた書庫は、そのすぐ隣に建てられ、渡り廊下でつながっていた。

拝殿の奥には、約三百年前に建てられたと伝えられる本殿があり、その本殿の裏手には小高い山があった。この裏山は、一般の拝観者は立ち入り禁止とされたいわゆる禁足地で、直久たち一族の者も、儀式がある時のみ通ることを許された場所である。その禁足地を細い山道に沿って登っていくと、奥宮^{おくみや}にたどり着く。境内の入り口には古びた石鳥居と、その鳥居をくぐるものを品定めするかのように守護獣が一体だけ鎮座していた。いわゆる狛犬であるが、今の本殿にいる一対の石像とはその姿が異なり、鋭い目と牙、大きな口を持つ狼の姿をしていた。今にも動きだしそうな、その狼のリアルさに、幼い直久少年は縮みあがる恐怖を感じたものだ。

そんな、恐ろしい獣が守護する鳥居をくぐると、偉大なるご先祖様『小夜』が造らせたとする、社が出迎えてくれるのである。かつては、一メートル四方の大きさしかないこの社が、本殿とされていたという。

直久は、詳しいことは知らされていないが、その奥宮には絶対に

近づいてはいけない、と幼いころから言い聞かされていた。

だが、近づくなど言われなくても、近づかない。冗談じゃない。

広大なこの朝霧神社の敷地には、そこかしこに樹齢何百年という木々が植えられていたから、昼間でも薄暗く、近隣の住宅や道路の喧騒から、完全に隔離した空間を作り上げていた。

ただでさえ、不気味な空間だというのに、そのさらに奥にある真っ暗闇へと、誰が頼まれたって踏み入るか。

直久は物心ついたところから、そう思っていた。

ただ、その奥宮の境内には、直久も一か所だけ心ひかれる場所があった。

奥宮の小さな社の裏に、一本の大きな木があるのだ。何の木だったか記憶にないが、あとから祖父に聞いた話によると、社と同じころに植えられたものだから、樹齢千年をかるく超えているのだろう。その幹や根の雄々しさといったら、直久にはどう表現していいかわからないほどだ。自分の知っているどの言葉も、陳腐で中身の薄い薄っぺらなものであるような気がして、その木に申し訳ない気もした。

まるで両手をいっぱい伸ばしたように枝を広げ、青々とした葉を風に揺らす様を、今もはっきりと思い出すことができた。

そういえば、最後にあの木を見たのは、何年前のことだっただろうか。

そして、あの恐ろしい狼の石像と、目が合ったのは――いつだったろうか。

「……」

直久は、ちらりと奥宮の方向に視線を移したが、すぐに肩をすくめて首をふった。

いくらその木をもう一度見たいと思っても、奥宮へ行くのは御免こうむる。いや、あり得ない。

それが直久の正直な気持ちだ。

「それが賢明だ。賢い選択だと俺は思う」

誰に向けた言葉なのか、突然直久はそう言うと、拝殿の脇から参道に抜け、そのまま大鳥居のところまで足を進めた。

それにしても静かすぎる境内は、やっぱり心細い。

「寒くたって、暗くたって、直ちゃんは平気なの。だって、男の子だもん！」

いつの間にか、直久は某アニメの主題歌を、変な替え歌にして口ずさんでいた。

ほどなく、神社の敷地と、それ以外を隔てる、黒々とした大鳥居の下にたどり着いた。

なぜか、直久の中に弟の声がこだまする。

『鳥居の内は、結界の張られた安全な場所。一步でも鳥居から出た瞬間から、僕らはヒトでないものに狙われる、ただの餌になるんだ。覚えておいてよ』

どうして、今それを思い出したのか分からない。いや、きっと理由なんてないんだろう。

（だって、俺は悪魔や悪霊にだって無視されちゃう、可愛そうな子だからな）

“無能”^{タダヒト}な直久を狙い、血肉を喰らったところで、ヤツらには何のメリットもないのだから。

と、そこまで考えたところで、直久はたと気が付いた。

（ん、まて？ 狙われる方がかわいそうなのか？ そうだよな。いちいち鳥居から出るのも命がけ、学校行くのも命がけなんて。うわ、だって良く考えたら……世にも恐ろしい期末テストをだ、妖魔たちから命からがら逃げられたとしても、待ってるのは極悪非道な教師が涼しい顔で作ったテストという名の拷問。さらには、赤点と課題をもらって帰ってくるなんて、俺、絶対たえられないもん）

心の中で、そう呟くと、ひとりでに笑みがこぼれてきた。

自分は、妖魔たちにまで見向きもされない、そんな薄い存在なのだと、かつては悩んだりもしたが、今はそうは思わない。

自分には、“無能”で生まれてきた理由があるのだ。それがまだ分からないだけで。

分からないことを、今の直久がわかろうとしたところで、きっとその情報は全然足りないのだろう。時が来れば、いずれわかる。その時を、じっと待つ。そう思うことにしたのだ。

もし、それで理由が分からないまま死んだとしても、それはそれでいいじゃないか。

悩んでへこんでる時間がもったいない。その間に、何倍も楽しいことをして、笑って過ごした方が、時間の有効利用というものではないだろうか。

（だってなく。コンビニで芳香剤買うのも一苦勞とかありえないだろう）

そう一人ごちて、直久は鳥居から足を一步前へ進めた。
その瞬間だった。

———ほんに、待ちくたびれたわ。

ぞわぞわっと、悪寒が足元から駆けあがってきて、直久の体がびくっと硬直した。

「……………」

静寂がさらに、直久を違和感へと誘う。

（今、何か聞こえたよな）

若い男の声だった。か細いが、でもはっきりと聞こえた。
恐る恐る首をひねり、左右を確認した。——誰もいない。

まさか後ろ？

ゆずるが追ってきたのか？

ぱっと、体ごと一八〇度回転させる。——誰もいない。

「……………おいおい？」

まさかな、と直久はそのまま頭上を見上げた。案の定、木々の葉の隙間から月が直久を見下ろしているのが見えた。

「そらそうだ。俺の頭の上を飛んでるとしたら、ムササビか天狗だ」一般的には鳥とか、虫、頑張ってもコウモリが、そこに上げられそうだが、ムササビがでてくるあたりが直久である。天狗については、もはやその存在すら危うい。和久が聞いていたら「うちは京都の鞍馬だったのか」などとぼやきそうだ。

（空耳かな……）

心なしか、一瞬で首が凝った気がする。ついでの、倦怠感に恐怖感は一気に増した。

（なんだ？ ……上向いたときに、首でも彎まったかな）

首をさすりながら、直久は心の中でつぶやいた。

だが、それではこの体中の倦怠感は説明できない。

まさか……。

直久の脳裏に、ある雪山の記憶がちらついた。

以前、ゆずるや和久の依頼を手伝った時に、二度ほど、悪霊の声を聞いたことがあったのだ。その時は、自分もついに能力が開花したかと思ったのだ。だが、それ以来ぱったり超常現象もなくなっていた。

あの時は、強力な悪霊だとか、神様だとか、その手のよくわからない特別な力が闘せめぎ合っていて、自分もそれに感化されただけだったのかもしれない。そう思うようになって久しい。——やっぱり自分は“無能”なのだ。

「やめやめ。考えないことにしよう。早いところコンビニ買って、芳香剤買わなきゃ。トイレ用でいいよな。色々あるから迷っちゃいそう。だって、ラベンダーの香りなら何でもいいんだろう？ いや、まて、どれが効くかわかんないし、薬局行って片っ端からラベンダー臭を買ってくるか。よし、店まで走り込みだ！！」

直久は、完全に頭を切り替え、走り出した。目的地はいつの間にか、本家から歩いて5分のコンビニではなく、走って十分の王手ド

ラックストアになっていた。

4 おそるべし芳香パワー

4 おそるべし芳香パワー

支度を終え、一行がゆずるの妹の家へと瞬間移動したのは、あと数十分で日付が変わろうかという時刻だった。

移動先のリビングでは、まるで来ることが分かっていた、という顔の女性が直久たちを出迎えてくれた。

直久の記憶の糸が、『ゆずるの母』という単語を引き当てる。

最後に会った時より、若干の小じわが増えたような気がするが、直久好みの美人の顔を忘れるわけではない。

「ゆり叔母さん、大丈夫ですか？」

直久は、叔母の顔を覗きこむ。ゆりは、その名にふさわしく、上品に微笑んだ。

「ありがとう、直ちゃん。でも、ゆずるが助けてくれるって信じてるから、心配してないのよ」

ゆりは、そのまま視線をゆずるに移し、ね、と言った。

ゆずるは、それには答えず、妹の部屋へと向かうために、その身を翻してしまう。

「和くんも、来てくれてありがとう」

ゆりが、わざわざ、和久の手をとって言った。

（あ、ひでえ。何その対応の差！）

美人の手を握っている弟を、明らかに恨めしそうに眺めながら、直久は心の中でそうつぶやいた。

「ゆずるのことは、僕が必ず守ります」

「お願いね。今、あの子あまり力が出ないはずよ」

「分かってます。でも、心配しないで。大丈夫、今日は直ちゃんだ
ってついてるんです」

「え、俺？」

そこで自分の名前が突如でてきたので、直久は驚きの声を上げた。
自分にやれることなんて、このラベンダーの芳香剤のキャップを
開けて、香りがいきわたるように扇風機を稼働させるくらいのもの
だ。

まさか、そのことを言ってるわけではないだろうし。

瞬時に、あれこれ思案すると、それが表情に出ていたようで、弟
がぷっ、と吹きだした。

「ゆり叔母さん、直ちゃんはこの間、大活躍したんですよ。一人で
悪霊をやっつけちゃったんだから！ その強さは、山の神様のお墨
付き」

「まあ、そうなの！ それは頼もしいわね」

ふふふ、と含み笑いをしながら和久が言うので、ゆりもつられて
クスクス笑った。

「さて、今、どっか可笑しいところあったか？」

慌てて直久が声を荒げる。

「ううん。喜んでるんだよ。直ちゃんの成長を。それに、今日は直
ちゃんをかなり当てにしているんだから、がんばってよね」

「頼りにしているわね、直ちゃん」

叔母に微笑みかけられ、うっかり直久は「任しておいってください
い！ たとえこの命が果てようとも！！ 優香ちゃんのことを助け
て見せます！！」と言ってしまいそうな自分を、なんとかこらえる。

「カズ」

優香の部屋から、ゆずるの声が聞こえてきた。

「今行くよ」

慌てて、和久は返事をしてから、再び叔母に柔らかな笑顔に向け
た。

「そうやって、笑っててくださいね。心配や不安は破魔の力を妨げ

ますよ」

一瞬、言われた叔母は、目をパチクリとさせたが、すぐにふわりと笑った。

「わかったわ。娘たちをお願いね」

「はい」

和久は、深く頷いた。そして、直久に向き直った。

「行くよ、直ちゃん」

「ガッテン承知の介」

リビングを後にしながら、和久は直久に苦笑いをして見せた。

「……承知の介？ 直ちゃん、それ古い」

「冗談は由之介。てやんでい、こっちとら江戸っ子だ。古いもくそもあるか」

「江戸時代の時代劇でも見てたの？」

「うん。さっき待ってる時、暇だったから」

それが何か？ と言いたげに、直久が和久を振り返った。

何かを言いかけ、諦めたように和久は小さく息を吐くと、これらの段取りを説明するよ、とだけ付けたした。

「まずは僕らで、お祓いしちゃうから、部屋の端っこで邪魔にならないように見ててね」

「お祓い？ 効かないんじゃないのか？ ほら相手は英語圏のヤツラだから」

「そうじゃなくて」

またそれか、と和久は思ったが、しっかりと説明してやることにした。

「基本的に東洋の妖怪も、西洋の悪魔も、人間が作り出した負の感情だという点で同じものなんだよ。だから、御経でも、祝詞でも、聖書の言葉でも何でも効果があるんだ」

「じゃあ何か？ 人間は幽霊になったとたん、英語も日本語もフランス語もドイツ語も中国語もペラペラになっちゃうてことか！？」

「一言も、そんなこと言ってないよね、僕」

和久は強調するように、ゆっくりと言ったのだが、直久はまったく聞いてない。

「いや、だってさ。テレビでよく、外国から来た太めのオバサンが、日本人の幽霊の悩み相談受けてるじゃん？ てつきり、その幽霊がたまたま英語が得意だったのかと思ってたわ。そうか、幽霊なら俺も英語がぺらぺらになるんだな」

「……だから、そうじゃなくて」

幽霊と通じている時は、言葉を使うというより、心を直接かよわせている。つまり、一種のテレパシーのようなものである。

そう兄に訴えているのに、兄の方は、まったく聞く耳を持たず、自分の妄想に陶醉している。

「そうか。英語が赤点になりそうになったら、幽霊になればいいのか。いやゝ、いいこと聞いた」

和久の口元が、一瞬、かすかにひくついたが、直久には見えていないようだ。

気をとりなおして、和久は「とにかく」と続けた。

「——今回の夢魔にお祓いの効果がのぞめないと言ったのは、そのくらいで追い払えるような弱い相手じゃないだろう、って言う意味だよ。一度やってみて、効果がなければ——」

「コイツと俺の出番だな」

兄が紫色の芳香剤をこちらに見せながら、得意げに和久の言葉を奪った。

「いつでも、俺は心の準備はできている！！」

「心の準備って、大げさな……」

「何を言う！ このキャップの下には、銀紙が付いててな！ そいつを、一度で上手く剥がすのがどれだけ難しいか、それをお前は知らんのか！」

「そ、そうなの？」

「上手くやらないとな、端っこにちょっとだけ残ったりして、そい

つが俺をあざ笑うかのように、キラリと光ってこう言うんだ。『はっはっは、悔しいか。悔しかったら俺様を取ってみろ、さあ、さあ！』ってな」

「……ごめん、直ちゃん。全然、共感できない」

と、その時、さすがに待ちくたびれたのか、ゆずるの呼ぶ声が再び二人の耳に飛び込んできた。

直久たちは慌てて、優香の部屋に入ると、ちょっと触っただけでみじん切りのされそうな目で、ゆずるが直久だけをまっすぐ睨みつけてきた。

「ごめん、待たせたよね」

ゆずるは、和久の問いかけには返事をせず、直久を睨み続ける。

（え、俺！？ 全部おれのせい！？ ……あ、うん。そうかも）

自分でも意外なほどあっさり納得した直久は、さきほど和久に言われたとおり、すぐごと部屋の隅へ自主的に移動した。

その殊勝な態度を、反省と受け取ったのか、ゆずるはあえて何も言わずに、和久の方へと向き直った。

「先に、お祓いを試しておいた」

「あ、ごめん、一人でやらせちゃったね。で、どうだった」

ゆずるが、顎で妹を見るように促した。

「……やっぱり駄目か」

「行くしかないな」

ゆずるの渋い声に、和久も厳しい顔で頷いた。

おそるべし芳香パワー (2)

「でも、夢の中で夢魔と鉢合わせしたら、危険だね。夢はヤツらのテリトリーだから、あつという間に食われるかもしれない」

「それでも、他に方法が見当たらないから、やるしかない。何をいまさら言いだすんだ」

ゆずるの顔に苛立ちが浮かぶ。そんなゆずるに、和久は逆に表情を和らげた。

「誰もやらないなんて言っていないよ。僕が行くから、サポートお願いね」

「馬鹿言え、俺が行く」

「だーめ。ゆずるには、万が一、夢の中で僕が夢魔と遭遇してやられそうになった時に、起こしてもらわなきゃ」

「駄目だ」

ゆずるは和久の言葉を、ばっさり切り捨てた。

「俺が入る」

「だめだめ。そんな危ないこと、ゆずるにはさせられないよ」
不意にゆずるの眉がピクリと釣り上がる。

「どういう意味だ？」

それは、それまで黙って二人の顔を交互に見比べながら、耳を傾けていた直久にもわかるほどの怒気を含んでいた。

「どういうって？」

和久の目がわずかに泳いだ。だが、その小さな動揺は、直久にも見破ることができないほど巧みに、和久の笑顔の下に隠されてしま

う。

「俺が――」

「違うよ」

ゆずるの言葉を遮るようにして、和久が言った。そして、いつもの優しい笑顔で続ける。

「ゆずるが次代だからじゃないか。次代に何かあったら、僕がどやされるじゃないか」

どうやら怒りは収まらないらしく、ふいっとそっぽを向いて、ゆずるはまくしたてた。

「お前が夢の中で夢魔と遭遇するより、俺が遭遇した方が助かる確率が高い！ お前なんか、一瞬で殺されるぞ。逃げる暇なんかない！」

「そうかもしれないけど、でも、ゆずるを危険にさらすより、ずっといい」

「冗談じゃない！　じつとカズが死ぬのを待っているというのか！　？　逆だろう！　カズも優香も守れないようなら、当主になる資格なんかない！！　違うのか！？」

睨み合いを続ける弟と従兄の顔を、直久は交互に見比べた。その険悪な雰囲気、口をはさむべきか、少し悩んだ。

だが、たいてい、直久が首を突っ込むと、物事は悪化するので、今回は自粛したほうがよさそうだな、と結論を出した時、和久の深いため息が聞こえてきた。

ゆずるの気迫に、ついに和久が折れたらしい。

「予想はしてたよ。そう言うだろうと思って、直ちゃんを連れてきたんだ」

「なに？」

「へ？」

ゆずると直久が同時に声を上げた。

「直ちゃんを連れて行ってね」

和久の言葉に、再び同時にゆずると直久は口を開いた。

「ほ？」

「いらない」

まったく話の流れが見えない直久は、ぽかんとした。

（今、俺が出てくる要素あった？　カズでも死にそうなほど危険な相手なのに、なんで俺が呼ばれるわけ？　ていうか、イラナイって、

俺、今言われた？ 直ちゃん、ちよっぴりしょつくー……」

わけがわからずにゴミ扱いされた直久は、弟へ救いを求めるように視線を送ったが、説明の言葉を得ることはできなかった。

弟はただ微笑んで、ゆずるに言い放った。

「直ちゃんを連れて行ってくれなきゃ行かせないよ」

言葉は柔らかいが、有無を言わせない強さがあつた。だから、ゆずるも少しトーンダウンせざるを得なかったようだ。

「直が、何の役に立つんだよ」

「いざって時に、盾になると思う」

「た、盾だーあー？」

猫以下扱いされたと思えば、ついに、生き物でもなくなった。さすがの直久も聞き捨てならない。思わず目をひんむいて弟に抗議しようとしたが、弟はするりとそれをかわして、ゆずるの正面へと回り込む。

「それにね、ゆずる。直ちゃんは、盾だけじゃなくて、他にも利用価値があると思うよ。」

例えば、直ちゃんと僕の体をリンクさせるんだ。直ちゃんがケガをすれば、その痛みは僕にも届くようにするんだ。そうすれば、どんな危険な目にあっているのか、すぐに分かるし。

“万が一”を僕に伝える合図になるでしょう？ 目を覚まして欲しいって時は、直ちゃんをぼっこぼこに殴ってくれればいいわけだから」

さりと弟が言うので、直久は一瞬何を言われたのか分からず、言葉に詰まった。

（待て待て待て！ 今、すごい酷いこと言われてないか！？）

「おいこら、ちよっと待ていっ」

「なるほど……」

また、直久とゆずるのセリフが同時に口を開いた。

「あのなあ。俺は一度、カズに聞きたいと思ってたんだけど、お前、俺のこと何だと――」

「ごめん、直ちゃん。その前にちよつとこっちむいて」

無残にも、直久の抗議は一瞬で切り捨てられ、直久はショックでコイのように口を開閉している間に、和久が直久の顔を自分の方へ向かせた。そして、その細くて長い人差し指を直久の額に滑らし、流れるような動きで何やら文字を描いてしまう。

「はい、できた」

呆然とする直久に、満面の笑顔で弟が念を押した。

「いい、直ちゃん。くれぐれも気を付けてね。直ちゃんがケガすると、僕も痛いんだからね」

なんてことだ。有無を言わずに、その理不尽な術をかけられてしまった。

いつもは、ほっとする和久の笑顔が、今はひどく恐ろしいものに見えた。

（そうなのよ。いつだって、僕ちゃんには選択権はないのです。とほほ）

心の中で死語をばやきながら、がっくりと項垂れた直久の目の前に、突如、誰かの手が差し出された。

何だ？ と顔を上げると、ゆずるが仏頂面で、こちらに左手を突き出しているではないか。

（な、なんだ！？ まさかこれは……！？）

しばらく、その差し出されたゆずるの掌と、ゆずるの顔、そして和久の顔を順番に見まわしながら、直久は思案する。

数秒後、何かを諦めたように深いため息をひとつこぼした直久は、まるで叱られた犬のように上目づかいになって、握りこぶしを作った右手をゆずるの掌にのせた。

「ワン！」

その場に冷たい沈黙が流れる。

少しだけ目を見開いて、驚いたように直久を見つめていたゆずるの顔は、見る見るうちにうんざりしたような表情に変わっていき、ついに口元がひきつりだした。

そこで、直久は事態を把握する。

「……………えっ、“お手”をしろって意味じゃ!？」

「なんで俺が、お前と愛犬ごっこしなきゃなんねーんだよ」

「新手の羞恥プレーかと……」

「アホかつ!! 今そんな状況か!? てか、その前になんでそんなことを俺がお前としなきゃなんねーんだ」

「だ、だから。今、すごい悩んだんじゃん。俺、すごい葛藤してたじゃん。プライドを捨てて、犬になりきったじゃん。もうちょっと褒めてくれてもよくない？」

「勝手にボール遊びでもしてろっ!!」

直久とゆずるのやり取りを見ていた和久は、堪え切れなかったのか、ぷっ、と吹き出した。

それをしり目に、ゆずるが苦々しい顔で舌打ちをし、乱暴に直久の腕をつかむ。

「たくっ。行くぞっ!」

ああ、なんだ。手を繋げという意味だったのか。

(だったら、そう言えよ。あーびっくりしたあー)

と、ほっと胸をなでおろしたのもつかの間、はたと直久は気がつく。

「手、繋いでいくんですかい!? 男同士でっ!? 冗談でしょっ!!」

「こっちだって、好きで繋ぐんじゃない。お前が、どこか別の次元に吹っ飛んで、帰ってこれなくてもいいっていうならいいんだぞ、手を繋がなくても」

「繋がります! 繋がせていただきます、喜んで!」
慌てて直久は、両手でゆずるの手を掴む。

それを見ていた和久は、いよいよ可笑しいというように、お腹を抱えて笑いだした。

「カズ、うるさい!」

「ごめん、ごめん。さ、仲良く行っておいで」

ゆずるは、からかうような和久を完全に無視して、優香の眠るベッドに向き直る。その顔は、すでに険しさが浮かんでいた。だから直久も、顔を引き締める。

集中力を高めるためか、ゆずるが、ふう、と一呼吸置くと、優香の額に右手を置き、ゆつくりと瞼を閉じた。そして、何やら呪文を唱え始める。

すぐに、ゆずるに合わせるようにして、背後から呪文を唱える和久の声が聞こえてきた。

そう言えば、いつの間にか、部屋にはラベンダーの香りが充満している。見れば、直久が適当に買ってきた五種類のメーカーの芳香剤が開けられていた。術で和久が一瞬で開けたらしい。なるほど、銀紙をはがす苦勞を知らないはずだ。

なんとなく、瞼が重くなってきた。

ゆずるの澄んだ声が、さらさらと流れるように耳から入り込み、全身を満たしていく。

ふわふわしてきた。

心地よい。

何よりこの香りが……。

(……トイレの……匂い……め……)

直久は……誘われるままに夢の中へと落ちていった。

5 虎穴に入らずんば

5 虎穴に入らずんば

ぱちりと直久の目が開いた。

げ、と息をのむほど至近距離にゆずるの顔がある。

直久は、反射的に体を起こして、ゆずるから離れようとした。が、まるで自分の体が磁石になったかのように、寝そべっている床から離れようとしなない。

「ふん……ふぬぬ……」

唸りながら、腹筋に力を入れて、起き上がろうと何度か試みたものの、首から下は指一本動かさそうもなかった。

いったいどうなってるんだ。

小さく息を吐くと、直久はゆずるにあらためて視線を送る。

これは、ゆずるが目覚めるのを待つしかなさそうだ。

自分ではどうすることもできない、そういう領域に首を突っ込んだことを、肌で感じて少し不安を感じた。

頭では理解していた。弟やゆずるのしている、この世とは別次元にある魔物の世界。

実際に体で感じるのと、頭で理解するのとではまるで違う。

肌の毛がぶわっと逆立つような静けさが、妙に気持ち悪くて、自分に弱気を連れてくるような気がした。

このまま、じっとしていると悪い方向にばかり考えがいつてしまいそうだ。それはまずい。

自分から『楽観』の文字を取ったら、残りは『イケメン』だけになってしまうではないか。

「おーい、ゆずる、早く起きろよー」

声をかけたものの、ゆずるは気持ちよさそうに眠っていて微動だにしなかった。

そういえば、こんなに間近でゆずるの顔を見るのは初めてだ。

(こいつ……こんな顔をしてたっけ?)

ゆずるは毎日、授業が終わるとすぐさま帰宅し、薄暗い本殿で祝詞を奉じること一族の安全を祈願しているという。

汗臭い体育館で、走り回っている自分とは違い、日焼けはおろか、しみやそばかす一つ見当たらない真っ白なゆずるの肌は、まるでゆで卵のようにつるつとしていて、柔らかそうだ。頬はうっすらと上気し、唇はぷっくりと膨らんだ果実のような赤い色をしていた。長いまつ毛は、切れ長の涼しげな目を覆い、影を落としている。

(きれいな顔してんなぁ。芸能人みたいだ……いや、芸能人ていうか……)

前から華奢だとは思っていたが、肩なんか触ったら折れそうなほど細い。

(運動しないで、籠ってばかりいるから、いつまでも筋肉がつかねーんだよ)

ちゃんと食べてるんだろうか。

一緒に暮らす相手が70過ぎの、干物に成りかけの老人たちでは、こてこての肉料理など食卓にはのぞめない。

そういえば、以前、ゆずるが一度もハンバーガーを食べたことがないと言って、目玉が飛び出るほど直久を驚かせたことがあった。極めつけに、ラーメン、パスタ、たこ焼き、スナック菓子も食べたことが無いと言うから、あんなに美味しいものを、食べたことがない生き物がこの地球にいるなんて信じられない、と直久はしばらくの間、ゆずるを不憫に思ったものだ。

(ほんと、ある意味すごい奴だよ、お前は)

直久は心の中でつぶやいた時、ゆずるの瞼がゆっくりと開いた。

直久の胸が、どきんと跳ね上がった。

すこし驚いたように、ゆずるは大きく見開いたが、見る見るうち

に、いつもの冷たい表情にもどっていった。

「何を見てる」

不機嫌そうにつぶやくと、ゆずるはすっと体を起こした。

「好きで見てたんじゃねーよ」

ゆずるは直久を無視して、立ち上がろうとし、はっと何かに気が付いたように振り返る。

「いつまで寝ている。早く起きろ」

「よくぞ聞いてくれました。体が動かないんだけど」

「……なるほど」

「なるほどじゃねーよ」

ゆずるは、繋いでいた手を離し、胸の前でパチンと両手を打ち鳴らし、何か呪文を唱えた。とたん、直久の体が自由になる。

「おっ？ 動けるぞ？」

直久はぴょんととび起きると、肩や首をぐるぐる回し、体の自由を満喫した。

「お前の体に、薄い結界を張っておいた。外の世界と同じように動くことができるはずだ」

ゆずるは、言い終えるや否や、首を左右にひねり様子を窺う。つられて、直久もあたりを見回した。

（あれ……ここ？）

どこかで見た覚えがある。

正面には、何枚もの窓。右を向けば、黒板。

後ろを振り返る。緑色の壁に、世辞にも上手とは言えないような絵が何枚も貼ってあった。その一枚に、『一ねん三くみ おおとも ゆうか』の文字を見つけた。

「教室……？」

直久がつぶやくと、ゆずるが小さく頷いた。

「俺たちが通った小学校だな」

「なんか懐かしいなーっ！」

急にこみ上げてきた感情と、記憶の断片が、直久を高揚させた。

外の景色を見ようと、窓へ駆け寄ろうとした時、ゆずるの低い声が飛んできた。

「やめておけ」

直久の足がぴたりと止まる。

「夢の中は、不安定な空間だ。見た目では数十センチの距離が、一瞬で数キロの距離になってしまうこともある」

「……まじかよ」

つまり、直久がゆずるのすぐ隣にいたとしても、突然何キロも引き離されてしまうことがあるということだ。

それは、自力で夢から脱出することができない直久にとって、致命的。永遠に、夢の中に閉じ込められてしまう危険をはらんでいる、ということなのではあるまいか。

（そ、そんなの御免だ！）

ここは素直にゆずるの言うことを聞くのが、無事に現実の世界へ戻る道だと、直久は思った。だから、素直にゆずるの次の言葉を待つ。

「行くぞ。早く優香を探さなきゃならない」

「あっ！」

ゆずるが歩き始めようとしたので、慌てて直久は引き止めた。

「なんだ」

「あの……手を……」

ゆずるの眉間にしわが寄る。

「嫌なんだろう？」

「た、確かに、お前と手を繋いで歩くなんて、夢にしてもたちが悪い。悪いが、お前と離れたら俺、帰れないじゃんっ！！」

「帰れないな」

さらりとそう言って、再び歩き出そうとするゆずるに、直久に本気で慌てる。

「ちよっ！！ 待って待って。帰れないな、じゃないでしょう。何、クールな顔で言っちゃってるの。はい、手繋いで！」

ゆずるが、ちっ、と舌打ちをする。もうひと押し、と直久は両手をこすり合わせ、拝むようにして見上げた。

「ね？　ね？　可愛そうな直ちゃんのために、手繋ぐくらい、いいじゃない」

自分の可愛らしく、小首を傾げて言ってみた。すると、本当に嫌そうに、まるで直久が地球史上まれにみる汚いものであるかのような顔で、ゆずるが直久の手を取った。

「そ、そんなに嫌！？　さすがの直ちゃんも、傷ついちゃうんだけど、その顔」

「黙れ。嫌なら離す」

うんざりした顔でゆずるが短く言い捨てるので、すぐさま直久は口を貝のように固く閉ざした。

こんな酷い扱いは、確かに許すまじきものではあるが、今はゆずるが直久の命綱のような存在である。なんとかご機嫌を取って、家に帰るしかない。文句や報復は、元の世界に帰ってからすればいい。それに、ゆずるがいつもよりピリピリしているのを感じる。

きっと、夢という不確かな世界の中で、その住人といつ鉢合わせするか分からないという状況が、そうさせているのかもしれない。その住人と出くわすことが、どれだけ自分たちにとって危険なことなのかは、直久には実感が持てないが、それでも現実の空間とどこか違うということだけは、さっきから肌で感じていた。

直久という荷物を抱え、自分の妹の命を助けるために、自分の命をかけて、敵の巣穴に乗り込む。

それは、誰が考えても、恐怖と重圧に押しつぶされそうなほど、とんでもないことなのではないだろうか。

（だから今は、大目に見てやる。しょうがねーからな）

直久は、そうやってなんとか自分を納得させて、ゆずるの右隣りに並び、歩き出した。

虎穴に入らずんば（2）



ゆずるが直久の半歩前を慎重に進み、教室の入り口まで数分かけて辿りついた。

そんなに用心しなければいけないのかと、直久は内心、縮みあがるほどの恐怖を感じていた。自分には見えないが、ゆずるの目には何か不気味なものでも見えているのだろうか。

ゆずるの横顔を見ても、それが並大抵の警戒心ではないことがすぐにわかる。

直久にはただの小学校の教室だというのに。

目に見えないという事実が、ますます直久を恐怖の奈落へと引っ張りこもうとしているように思えてならない。

ゆずるが、一呼吸置いてから、ゆっくりとドアに手を伸ばす。まるで、何かを覚悟したかのようなゆずるの強い瞳に、直久の喉がごとくりと鳴る。

「開けるぞ」

ゆずるが言った。

（そ、そんなにやばいのかよ！）

心の中でそう叫びつつ、直久はなんとか声が震えないように「おう。いいぞ」と答えた。

ガラガラッと音を立てて、教室のドアが開けられた。

眼の前に現れたのは廊下——ではなく鉄棒。

（て、鉄棒！？　なんでこんなところに？）

手を伸ばせば触れるほどの至近距離に、直久の腰あたりの高さの鉄棒が数個並んでいたのだ。その隣にはブランコ、遠くの方にはバスケットゴール、サッカーゴールが見え、その奥に、今自分たちが

いるはずの校舎がある。これはどう見ても……。

「……校庭だ……」

そう言った直久の声は、驚きにかすれてしまう。

教室を開けたというのに、その向こうにあったのは校門から校舎を見た風景であった。

信じられない。

いったいどうなっているんだ。

直久は呆然となったまま立ち尽くすしかなかった。

だが、逆に隣からは、ほっとしたように息を吐く音が聞こえてきたから、ますます直久はキツネにつままれたような顔になる。

明らかに、直久の知っている小学校とは違うのに、というか、現実ではありえない光景が広がっているっていうのに、なんでゆずるが安心したような顔をしているのか、さっぱり理解できない。直久はゆずるの顔をまじまじと見つめ、その答えを探した。

その視線に気が付いたゆずるが、バツの悪そうな顔を一瞬見せ、すぐにいつもの無表情な顔に戻してしまう。

「夢の中の空間はおかしいって言ったろ？　あるべき所にあるべき物が無いっていうのはよくあることだし、こんな場所にこんな物があるはずないのにあるっていうのも、よくあることだ」

「つまり、教室のドアを開けたら、校庭じゃなくて砂漠が広がっていたかもしれないわげか？」

「砂漠や草原ならまだいい。火の海だったり、深海だったりしたら、死ぬぞ。確実に」

突然、ゆずるの口から飛び出した“死”という言葉に、直久はぎくりとなった。

「ゆ、夢の中で死んだらどうなんだ!？」

直久の声が、勝手に上ずった。

「二度と目を覚ますことなく眠り続ける。肉体は現実の世界に残っていたとしても、魂は死んでる状態になる。そのまま肉体が何年も眠り続けることもあれば、魂の死と同時に肉体が腐敗していくこと

もある」

「……ここで死んだら、終わりってことかよ……」

「そうだ」

ゆずるの言葉に、直久は頭を鈍器で殴られたような衝撃を受けた。実は自分がものすごく危険な所に居るんじゃないだろうか。

しかも、自分一人では何もできないというのに。

身を守る術も持ち合わせていなければ、家に帰る方法も知らない。何だって、こんなところに来てしまったのだろう。今頃、家でやすやす寝ているはずだったのに。

（ここで死んでも、ゆずるとはぐれても、俺は死ぬとか……ありえない？）

いままで、直久が自分の死を身近に感じたことはない。だが、こゝもわけのわからない、自分の能力の限界を超えた様を見せられると、意識せざるを得ないじゃないか。

このまま、自分はここで死ぬかもしれないと。

「式神を呼ぶか」

直久は、はっとなってゆずるを見た。ゆずるは、今までになく厳しい表情をしていた。

「式神……」

「ああ。案外、複雑そうだからな」

式神という単語を、瞬時に脳内で“手下の妖怪”という言葉に置き換える。そして、なんとなく違和感を覚えて、それをゆずるに問う。

「何？ 今、近くにいないのか？」

和久が今日も突然「僕、家に帰るね」と言い出したのも、その式神の仕業であったが、いつも和久のすぐそばにいたといったイメージを持っていた。守護霊のような、背後霊のようなイメージだ。だから、ゆずるが『呼ぶ』と言うのが不思議だったのだ。今、ゆずるのそばに式神は居ないのだろうか。

なんとなく直久はあたりを見回す。当然だが、見回して見てもや

っぱり何も見えない。

「式神の所有の仕方は人によって違う。和久の場合、体内に入れて持ち歩く。体内と言っても、心臓とか、肺とか、具体的な部位に、という意味じゃない」

和久の式神は『雲居』と言って、大蛇の妖怪らしい。人型を取ると、超が百万個付くくらいグラマラスな美女なんだよ、と和久が言っていたのを覚えているが、直久は一度もその“だいなまいとばでー”を拝んだことがない。

だから、どんな感じで弟とその巨乳美人が共存しているのか、妄想すると止まらなくなるのは、ご容赦願いたいところだ。

そんな直久を放置して、ゆずるは続ける。

「言うならば、体の表面にオーラのようにまとわり付かせるようなものだ」

「なーんだ。普段から人型してるわけでも、蛇になってぐるぐるに体に巻きついてるわけでもないわけね」

「……そうだな。この所有の仕方をしている者が式神を喚ぶ時、気を普段の倍以上に体内から放出する。それを餌にして、式神は元々の姿を取り戻し、姿を見せるというわけだ」

「ふうん」

要するに、使わない時はコンパクトサイズで主人の回りを取り巻いていて、いざという時には、主人の霊力を食って実体化して働くということなのか。

（なんか、乾燥ワカメみたいだな。水を吸って、でっかくなるだけじゃなくて、巨乳美人になるワカメなら、めっちゃめっちゃ売れると思うけど！！ ていうか、俺は買う）

腕を組み、うんうん、と一人直久は頷いた。

「で、お前は乾燥ワカメ……じゃなかった、カズとは違って式神がいつもは別のところにいるのか？」

「そうだ。俺は九堂家の人間だからな」

そこで、直久はうっかりその事実を忘れていたことに気が付いた。

同じ一族でも、直久たち分家と、本家の九堂家はまったくの別の次元にいるような、そんな印象を直久は持っていた。

世間一般から見たら、どっちも変わらないのだろう。どっちも、おかしい能力をもつ、ヘンテコな一族だ。だが、曲がりなりにもそのヘンテコな一族の末裔である直久ですら、ヘンチクリンだなぁと思うのが九堂家の住人だ。

そのヘンチクリン代表が、直久の祖父であり、次のヘンチクリン代表がゆずるになるわけだから、なんだか不思議だ。

（こうして見ると、俺と何にも変わらないのにな）

自分が“無能”であること以外は――。

直久は、そんなことを考えながら、ゆずるの形のよい唇が再び動き出すのを眺めていた。

「九堂家当主が所有する式神は、その昔、小夜が所有していた式神だ」

小夜の式神の話は、直久でも知ってる。

強大な妖力をもつ一匹の白狼から生まれた九匹の妖狼。

そのうちの八匹を式神として従えることができれば、一族の当主として認められるのである。

「式神たちは、能力も最強クラスだし、性格的にも扱いづらいのが多い。気性が荒かったり、人間嫌いだったり、気まぐれだったりするからな」

（なんだか、うちの姉貴の顔が浮かんしたのはキノセイだろうか）

直久は、苦笑いしながら、ゆずるの右手が宙に持ちあがるのを眺めた。ゆずるの形のいい中指と人差し指が、するすると空中に文字を書くように流れる。

（……『炎』と……『刈』？）

「出でよ、炎^{ほがり}刈」

ゆずるの声に合わせ、足元から上空に向けて突風が巻き起こった。その風の勢いに、直久は思わず目を閉じ、ゆずるの狩衣の袖がはたはたと舞い上がる音に耳をすませるのが精いっぱいだった。

「先詠、風酔」
さきよみ かざよい

ゆずるが式神の名を呼ぶたびに、風が舞い上がる。

(ん？ 先詠？)

それは直久の自宅の神社の名前だった。

まさかな、と直久はそれ以上気に留めなかった。

しかし、風が収まったところで、直久は顔を上げ、すぐに眉を寄せることになる。

「風酔。お前、また酒を飲んだのか？」

ゆずるが明後日の方向を向いて、そう言ったのだ。明らかにそこに誰かが居るかのようになり、うんざりしたような顔をしながら。しかも、鼻の前で右手をひらひらと仰ぐようにしている。

「もしかして……式神が来たのか？」

直久は、恐る恐る聞いた。それを受けて、ゆずるはあっさりと頷いた。

「ああ。風酔、先詠、炎刈を呼んだ」

「そうなんだ？ 俺には何にも見えないけどな」

「酒臭いのは？」

ゆずるが、右前方を睨むようにして言った。

「いや？ まったく感じないけど？」

「それはいいな。真昼間から飲んだくれてる奴がいてな。さっきから酒臭くてかなわん」

ゆずるはため息をついた。

「ふうん。式神って酒飲むんだ？」

「浴びるほど飲む奴もいる。今、俺の目の前にな」

ゆずるはそう言ったあと、再び右斜め前方を睨んで「屁理屈を言っていないで、優香を探して来い。炎刈も一緒に行け」と付け加えた。直久は一瞬びっくりしたように目を見張り、ゆずるを眺める。

ああ、なるほど。風酔とかいう式神が何か発言したのか。

なんだか、ゆずるの一人コントを見ているような気分で、可笑しかった。

虎穴に入らずんば(3)

ゆずるが慎重な足取りで歩き出した。その手に引っ張られるようにして、直久も鉄棒の脇を通って、校庭の中央へと足を進めた。

ゆずるの呼んだ式神の『先詠』が二人を先導してくれるとあって、先ほどよりも直久の足取りも心も軽くなっていた。つられて口も軽くなったらしい。

「さっき、風なんとかは、何て言ってたんだ？」

直久が問うと、意外にもゆずるはするすると話始めた。

「風酔だ。こいつは、酒さえあればあとはいらない、って単純な奴だ。『俺に飲んでほしいって人間の方から酒を持ってくるからしかたない』とかほざいているから、仕事を言いつけた」

「人間の方から持ってくる？」

そう言いながら、いつもより饒舌だな、と直久は不思議に思った。正直なところ、無口なゆずると二人つきりになるのはご遠慮したいところだったから、ちようどいい。

どうせ、いつもより機嫌がいいのか、それとも、死と隣り合わせの緊張感で、逆にハイテンションになっているのか。きっとそんなところだろうから。

「名前だろう。『風酔神社』なんて偉そうに掲げてるから、人々が酒の神様なんて崇めるんだ」

直久の眉が寄る。

「風酔神社って、あの風酔神社か？」

「そうだ。他に何がある」

直久が知っている神社は、直久たち双子の姉の夫の実家だ。夫といっても、やっぱり一族の者で、直久にとっては父方の従兄にあたる。

「待て待て。じゃあ、何か？ さっきの『先詠』っていうのも……」

恐る恐る直久が問うと、ゆずるがさりと云つてのけた。

「そうだ。お前の家に住んでる妖狼の事だ」

直久は、一瞬何を言われたかわからなかった。

(ちよつと……さて)

つまり、家の『先詠神社』にいるのは、神様なんかじゃなくて、妖怪だということのか!?

そんなでもって、今、目の前にその妖怪がいるっていうのか?

全然見えないけどっ!!

「ええええええっ!」

突然叫んだ直久に、逆に驚いたのはゆずるだ。

「ば、ばか!」

ゆずるは慌てて直久の口を両手で塞ぐ。

「夢魔に気づかれたらどうするんだ」

「んが」

そうだった。隠れているんだった。

直久は、謝意を表すように、両手をこすり合わせた。それを見てゆずるが渋々、口を解放してくれる。

「まさか、俺の家が、妖怪の寝床だとは思わなかったわ」

「俺は、お前がそれを知らないで生きてきたことに驚く。表向きは、神を祀っていることになっているが、一族の中ではそこが九匹の妖怪の住処になっているということは、当たり前のことだ」

「そうだったのか……」

「だから、九の神社を我々は守っているのだろうか?」

なるほど、と直久は思った。

「じゃあ、あさぎり『朝霧神社』も……」

「そうだ。だが『朝霧』という妖狼には俺も会ったことがない。どこかで眠っているらしい」

「眠ってる?」

「小夜が死んでからずっと、眠りにについているんだ」

直久は、また小夜か、と思った。

さつきから、何かにつけてその名前が出てくる。

今まで自分の一族について出来る限り考えないようにしていたから、気にならなかった。だけど、こうして話を聞けば聞くほど、その謎の女の名ばかりが登場する。

いったいどんな女だったんだろうか。

『小夜』がいなければ、自分はこの世にいない。

だが、『小夜』さえいなければ、自分たち一族も存在しないし、そしたら、自分はこんなに悶々と人生について悩んだり、普通の人間としての暮らしにあこがれたり、自分にはキラキラ光って眩しい携帯ショップの前を逃げるように走りぬけることも無かったのだ。全ては、一族が神様のように崇める『小夜』とかいう女のせいじゃないか。

「朝霧は……」

ゆずるの声に直久は、ゆずるの顔を見やる。

「朝霧は、小夜が死んだ後、長い長い眠りに付いた。一族の誰も、朝霧の姿を見た者はいない。人間の世界に絶望したためだと伝え聞いている」

「絶望？」

「分かる気がする。人間の愚かさや醜さに、嫌気がさしたんだろうな。でももう一つ理由がある気がする」

「もうひとつ？」

「……いや、何でもない。先を急ぐぞ」

直久は静かにゆずるの顔を見つめた。その表情はどことなく寂しげに見えて、なんとなくかける言葉を見失った。

とその時だった。

ゆずるが、はっとしたように顔をこわばらせた。

ビリビリと電気のようなゆずるの緊張が繋いだ手を通して、直久にまで伝わってくる。

何かがあった。

直久はゆずるの視線の先を追う。

何も見えない。

瞬きしても、目を凝らしてみても。
自分には何も見えない。

「どうした？」

不安に耐えかねて、直久が口を開いた。間髪いれずにゆずるが、ナイフのような目で睨みつけてきた。

「黙ってろ」

直久は口を閉ざすしかなかった。

ゆずるはこの時、はっきりと聞いた。

一瞬だったが、不気味な笑い声だった。

まるで夢魔が、自分たちを嘲り笑うかのように。

まさか、気付かれたのだろうか。

飛んで火に入る夏の虫。そう言いたいのだろうか。

『ゆずる、聞こえたか？』

ゆずるたちのメートルほど先を歩いていた獣が、こちらを振り返ることなく話しかけてきた。

「聞こえた」

ゆずるは、ごくりと喉を鳴らした。

『近いぞ。急いだ方がいい』

ゆずるの身長のは倍は体高があるその妖獣は、まるで体重を感じさせない軽い身のこなしで宙に舞うと、足音も立てずに、ゆずるのすぐ隣へと降り立った。巻き起こった風がゆずるの髪を揺らす。

『乗れ』

「わかった」

そう言うと、ゆずるは直久を振り返った。不安そうにこちらを見つめ返している直久を、少し不憫に思う。

きっと何が何だかわかっていないに違いない。
分からないことが、どれほど恐怖を与えるか。
見えないことが、どれほど不安を作り出すか。

ゆずるには痛いほど分かった。

ゆずる自身、月に一度、新月の日に、直久のように“無能”になるのだから。

だから、少しでも直久を安心させてやりたくて、式神を呼んだのだ。

「直。式神が運んでくれる。絶対に大きな声を出すなよ」

直久の眉が詰められた。

「わ、わかった」

その返事と同時に、式神の先詠が直久の襟もとを咥え、自分の背へと放り投げた。

「うっ……」

思わず声を上げそうになったのだろう。直久が、必死に自分の口を両手で押さえ悲鳴をこらえた姿のまま宙を舞う。そして、そのまま大きな妖狼の背にべちゃりと不格好に着地した。

さらに妖狼は、ゆずるのことも同じようにして背に放った。だが、ゆずるはひらりと身を翻して、すんと収まる。

「ど、ど、ど、ど……」

直久がこれ以上ないくらい目を丸くして、わけのわからないことを言いだした。どうなっているんだ、と言いたいのだろう。

それもそうだ。直久にはこの大きな獣の姿が見えていないのだ。

自分たちが宙に浮いているとしか考えられないに違いない。

地面から数メートルの高さに浮いたまま、足元を見下ろせば普通の人はかなりの恐怖を感じるものだ。

「落ち着け。落ちたりはしない。歩いて移動するより、先詠の背中に乗ったほうが安全だ」

「ゆ、夢だ。これは夢だ……」

「おい、聞いているのか？」

放心状態の直久を、ゆずるは覗きこんだ。が、ほぼ同時に妖狼が話しかけてきたので、すぐに意識をそちらに奪われた。

『動くぞ。掴まれ』

「待て」

慌ててゆずるは直久の両手首をつかんだ。そして、自分のウエストに回す。

「直、しっかりしろ。俺に掴まれ。振り落とされるぞ」

「え、な、うわああっ」

直久が叫び声をあげたのと同時に、妖狼が風を切って走り出した。反射的に、直久がゆずるに力いっぱい抱きついてきた。

ゆずるの顔がキグリと強ばる。

「……く、くつつき過ぎだ、離れろ!!」

ゆずるは、慌てて直久の頭を押さえて、自分から引きはがそうとした。だが、直久も必死だ。ゆずるから引き離されれば、落ちる。

振り落とされる。だから逆に、全力でゆずるに抱きついてきた。

「無理ーっ!!」

「離れろってっ!!」

「落ちる、落ちる!!」

ゆずるが拒否すればするほど、直久の腕はゆずるの腹部から上部へと移動しながら、がっちり巻きついてくる。

「や、やめろっ!! 離せっ!!」

「死んでも離さないっ!! だって離したら俺死んじゃうじゃんっ!!」

ゆずるは慌てて、抵抗をやめた。

「分かったから、もっと下に……」

ゆずるはなんとか、直久の腕を自分のウエストの位置に戻した。

『お前たち何やってんだ?』

風速で走りながら、そう言って妖狼がカラカラと笑った。

「うるさいっ!!」

『顔赤いぞ』

「黙れっ!!」

『ヘイヘイ……飛ばすぞ。ちゃんと掴まれ』

妖狼の速度が増した。

かなりのスピードで走っているのに、目の前に見えている校舎が、なかなか近づいてこない。

ゆずるは首を右にひねった。

猛スピードで流れていくのは、鉄棒、ブランコ、サッカーゴール、鉄棒、ブランコ……。

同じものが同じ順番に過ぎ去っていく。

「先詠、駄目だ。このままじゃ、時間の無駄だ」

『そうだな。急がば回れてことか?』

ゆずるは、はっとなって頭上に視線を投げる。

「上だ!」

ゆずるの頭上には、まるで天地が逆さまになったような、学校のプールが自分たちを見下ろしていたのだ。

『なるほど』

途端に、先詠が上に向かって駆けあがった。あっという間に、宙返りするようにして、妖狼がそのプールの水面に着水する。

「うわああああああ」

視覚に逆らったのが気持ち悪かったのか、ゆずるの背後から直久の悲鳴が聞こえたが、構っていられない。

『ふん。上に進めば、一瞬で次の空間にたどり着くとはな』

「次の入り口はどこだ」

『おそろくこっちさ』

妖狼は得意げに言うのと、水中へと勢いよく身を躍らせる。

（まさか、水中か——!）

さすがのゆずるも、着水の直前に息を止め目をつぶった。

「のああああ」

ばしゃりと音を立てて、ゆずるの体も水中へと投じられるのと、ほぼ同時に、再び背後から叫び声が聞こえた。

数秒後、ゆずるはぱちりと目を開ける。

（やはり、これもフェイクか……）

水の中だというのに、水圧はおろか、水に濡れる感覚すら感じられない。普通に呼吸もできる。

だが、確かに水中であるかのように、口から出た気泡はキラキラ輝きながら頭上へと上っていくし、時折ボコボコっという水音も聞こえた。

なんとも不思議な感覚だった。

衣服や髪は浮力で舞い上がっているように見えるのに、ちっとも濡れてないのだから。

『あったぞ、入口だ』

妖狼は、プールの底にある排水溝めがけて走り続ける。すぐ近くにあるように見えて、かなり遠いようだ。

水面近くでは、十センチほどに見えていた排水溝は、近づくにつれ、どんどん大きくなっていく。

ついに、目の前まできた時には、妖狼よりも数十倍の大きさになっていた。

（なんて大きさだ……）

排水溝の奥の暗闇がゆずるたちを嘲り笑うかのように待ち受けるように見えた。目を凝らしてみても、黒一色で塗りつぶされた空間は、どこへ続いているのかわからない不気味さを漂わせている。

ゆずるは思わず息を飲んだが、先詠の方は、迷うことなく、まるで次は何が出てくるのかと、楽しむように、排水溝の先にある真っ暗闇へと飛び込んでいった。

6 鬼ごっこ

6 鬼ごっこ

優香は出来うる限り息を殺した。

けれど、走り通しの上、いつ見つかるかわからない緊張感が、鼓動を早くし、呼吸を荒くする。

——ひゃーひゃーひゃはははははは。楽しいねえええ。鬼ごっこは、僕大好きなんだよおおお。

優香の小さな体がびくりとなった。

声は近い。

その不気味な笑い声の主を、優香は知っていた。

アイツだ。

まだ追ってくる。

優香だけを。

だって、“ここ”には優香とアイツしかいないから。

アイツは優香がいずれ、捕まることを知っている。

だから、焦りもしない。恐れもしない。

ただ、ただ。

獲物が疲れて、衰弱していくのを、楽しみながら待っている捕食者に過ぎない。

それを優香は本能的に感じていた。

あの不気味な人形に見つかったら、自分は死ぬのだ。

あの人形に、生きたまま食べられてしまうのだ。

あの大きな口で、自分のはらわたを食いちぎり、口元を真っ赤に濡らして自分の生き血をすすめるのだ。

(お兄ちゃん……助けて!!!)

優香は祈るような思いで、胸元から紐で下げられた小さな布袋を握りしめた。兄が自分のためにと作ってくれたお守りだった。

『何かあったら、そのお守りに祈りをささげろ』

兄の声が頭の中でこだまする。

『怖がったらいけない。相手の思うツボだ。怖くなんかない。すぐに俺が助けに行く。だから、それまでの間、小さくなって隠れてい
るんだ』

そうだ。

すぐに兄が助けにきてくれる。

もう、すぐそばにいるかもしれない。

それまで、自分は隠れていればいいんだ。

『まずは、深呼吸だ』

記憶の中の兄に導かれるようにして、優香は、深く息を吐いた。

落ち着け。

落ち着くんだ。

『手の中のお守りに意識を集中して』

(集中……)

優香はゆっくり目を閉じる。

と、途端に、優香の小さな手の中の、数センチほどしかない布袋から、かすかな青白い淡い光が放たれた。しかし、その光のあまりにその弱弱しさに、優香自身も気づかないほどであった。

『集中して……集中して……そして、俺の名を呼べ!!!』

優香の瞳が力強く開かれた。

(お兄ちゃんっ、助けてっ!!!)

その刹那、まるで爆発が起きたかのように、青白い光は一気に輝きを増した。



プールの排水溝に飛び込んだ先は、小学校の校舎内であった。いったいどこに飛ばされたのだろう。

最初の教室にもどった、ということはない、と信じたいが、夢の世界ではそれもあり得ないと言い切れない。

そんなことを考えながら、ゆずるは恐る恐る目を開けた。

『今度はどこに入口があるんだ？』

狭苦しそうに頭をもたげて、妖狼が言った。

体高が三メートル以上ある先詠には校舎の天井が低いようで、思うように身動きが取れないようだ。

ゆずるは体を乗り出して、あたりを見渡そうとしたが、妖狼の体が邪魔でそれかなわないう。ここは自分たちの足で、次の空間へと続く、入口を探した方が早いかもしれない。

ゆずるは自分の考えを、妖狼に伝えようと、ゆずるが降りやすいようにと、妖狼が体を低くしてくれた。

「直、降りるぞ」

そう声をかけながら背後の直久を振り返る。直久は、目をぎゅつと閉じたまま、声を出さずにゆっくりと頷いた。その体は小刻みに揺れている。

(直……)

無理もない。

宙に浮いたまま、高速で上に下にと振り回されれば、誰だって怖い。安全が保障されているジェットコースターとはわけが違う。自分の腕力で、ゆずるにしがみ付いてなければならぬし、万一、振り落とされれば、自分には死が訪れる。そう言われて、普通でいられるはずはないのだ。

ゆずるの瞳に、心配の色がちらりとのぞく。

もう少し、氣遣ってやればよかった。

きつと、和久ならば何か気のきいた優しい言葉をかけてやれるのだろう。直久を安心させてやれるような、一言をあの陽だまりのよ
うな笑顔で。

でも自分にはできない。また、そんな余裕もない。

「……掴まれ」

ゆずるは低く唸るように言うと、自分のウエストに巻かれた直久の腕に手を添えて、妖狼の背を勢いよく蹴った。宙に浮いた二人の体を、すかさず妖狼の柔らかな尻尾が受け止める。そのまま、尻尾に運ばれるようにして難なく床に着地することができた。

「さあ、もう大丈夫だろう？ 目を開けてみる」

かたくなに目を閉じたままだった直久に、ゆずるは声をかける。

直久は、おそろおそろ重たい瞼を開けていき、見えた風景にほっとしたように息を吐いた。

「ここは……音楽室？」

直久のかすれた声で、ゆずるは初めて視線を室内へと向けた。妖獣の背からでは、ふさふさの獣毛が邪魔をして何も見えなかったのに、自分の背丈の目線になったとたんに色々なものが見えてきた。

まず、目に飛び込んできたのは、妖狼の脇の間からちらりとのぞくようにして見えた、黒光りする物体だった。――ピアノだ。

その一部しか見えていなくとも、立派なグランドピアノがすぐに想像できた。妖狼が少しよろければ踏み潰してしまいそうなほど妖狼のすぐ真下にあったため、妖狼の背中から目視できなかったのだろう。

視線をピアノから少し上部にスライドさせると、眠そうにあくびをする妖狼の顔越しに、黒板が見えた。黒板は上下にスライドできる型のもので、確かに音楽室にでしかありえないように、五線が引かれていた。

ゆずるは、さらに視線を背後へと移動させていく。

ふと、ある一転でゆずるの目の動きが止まった。

「見つけた」

ゆずるが呟くと、妖狼は耳をぴくりと起こして反応する。

『どれだ？』

ゆずるは、音楽室の後ろの隅にある、縦長の掃除用具入れを指さした。

「あれだ」

『なるほど。なれば早くおさらばするでしょう。ここは狭くてかなわん』

「お前、小さくなれるだろう？」

ほふく前進をしながら、掃除用具入れに近づいていく妖狼に、ゆずるは当然の疑問をぶつける。

『おほ！ その手があった』

「……」

とその時だった。

——！……っ！！

ゆずると妖狼は、同時に動きを止めた。

顔をこわばらせ、妖狼を振り返ったゆずるの声が、喜びに震える。

「……今のは……優香だ」

間違えるわけない。

優香の思念が、確かに“聞こえた”。

生きてる！

確かに、まだこの世界に生きている！！

ゆずるは、わけのわかっていない直久を振り返り、思わず歓喜の声を上げた。

「直！ 優香の声だ！ 今、優香の声が聞こえたんだ！」

「まじかつ！」

「優香はまだ無事だっ、生きてる！」

「そうだな。早く見つけてやらないと！」

直久の顔にも、久しぶりに笑顔が戻っていた。だから、ゆずるも自然に笑顔を返した。

優香はきつとまだ無事だ、そう信じていた。でも、どこかで、もう駄目かもしれない。夢魔に食べられてしまったかもしれない。そう思う時もあった。

これで、生きていることは分かった。あとは、優香を夢魔よりも早く保護して、この薄気味悪い夢の世界から抜け出すだけだ。

ゆずるの瞳に、みるみるうちに希望の光が灯って、力強く光り出した。

「先詠。優香の保護が優先だ。優香を探しに行け。他の狼たちと協力して、何がなんでも探し出せ」

『わかった。でもどっちから“声”が聞こえたんだ？俺には方向までは分からなかった』

妖狼は優香の気配を探ろうと、首を右に左にひねりながら、鼻をひくひく動かした。

「一瞬だったから、俺にも分からない。でも、近くにいるのは間違えない」

『さすが、ゆずるの妹だ。よく生きてたな。こんなところでたった一人で逃げ回ってるとは、見上げたものだ』

「だが、時間の問題だぞ。今の“声”は夢魔にも聞こえたはずだ」
『そうだな。兄たちと一度集合してから、手分けして探すことにする。何かあったらすぐに呼べ』

「頼んだぞ」

妖狼は、風を巻き上げ、一瞬で姿を消してしまった。瞬間移動だ。ゆずるが、静かに直久を振り返った。不安そうな直久の瞳とぶつかる。

「……先詠は、もう、いないのか」

「大丈夫だ。俺が、誰も死なせやしない」

本当は、そんな自信も、保障もない。

ここからは、ゆずるが自身の命と、そして直久の命を守らなければ

ばならない。

だが、恐怖に負けたら相手の思うつぼだ。

不安に喰われたら、全てを失ってしまうんだ。

ゆずるは、自分の動揺を落ち着けるため、自分の神経を研ぎ澄ますため、一度だけ大きく深呼吸をした。

（大丈夫。夢魔に出会わなければいいだけだ）

自分に言い聞かせるように、ゆずるは心の中でつぶやいた。

「行こう」

二人は、音楽室の隅にある掃除用具入れの中へと足を踏み入れた。

鬼ごっこ(2)



掃除用具入れの中は、直久が思わず息を飲むほどの広さだった。入口こそ狭いのだが、箒を取り出してしまおうと、その奥はトンネルのように真っ暗な闇が続いている。

今度はこんな所を歩いていくのかと、一瞬にして足が重くなるのを感じる。これではまるでお化け屋敷だ。

だが、ゆずるは迷う様子もなく、確かな足取りで掃除用具入れへと足を進めるので、直久もゆずるの手に引っ張られるようにして、と片足を踏み込んでしまった。

途端、埃とカビの臭いが鼻に付いた。思わず顔をしかめる。

だがそれも一時のことで、すぐに慣れた。正直それどころではなかった。

奥は暗闇で何がどうなっているのか見当もつかない。その恐怖と不安といったら、勝手に足が震えだすほどだ。

それを何とかゆずるに気づかれないようにするのに必死になりながら、直久は、ゆずるの手に導かれるままに、暗闇に続く掃除用具入れの奥へと歩き始めた。

すぐに、不思議なことに気づいた。

真っ暗闇で、照明も無いのに、なぜかゆずるの姿がはっきりと浮かび上がって見えるのだ。

夢の世界は何でもアリかよ、と思いながら直久は一步一步、足を繰り返す。

暗闇には地面も空もない。

空中を歩かされている感覚に襲われた。

進んでいるのかどうかもわからない。

戻りたくても、来た道すら見当たらぬ。

ゆずると繋いだ手だけが、今は唯一の救いであり、命綱だった。自然にその握りしめた手に視線が行ってしまう。

この手が離れたら――。

一瞬、それを想像して、直久は頭から冷水をかけられたような、すさまじい恐怖が生じた。

気が狂う。

こんな所に置き去りにされたら、正気ではいられない。それだけは確かだ。

途端に足がすくんだ。

かくかくと膝が笑う。

どうしよう。

一人ぼっちにされたら――――どうしようっ!!

頭の中が、後から後からわき上がる恐怖で今にもパンクしそうになる。

怖い。

嫌だ。

もう無理だ!

怖い怖い怖い!

暗闇に押しつぶされそうで、叫びそうになったその時だった。

「もうすぐだ」

まるでどん底にいる直久の心に一筋の光が差し込むようだった。

「もうすぐ出口だから」

ゆずるが、自分を安心させようと言ってるのがわかった。同時に、その時初めて、自分が息を止めて歩いていたことに気づかされる。

大丈夫。

心配するな。

笑顔こそ見せないが、振り返ったゆずるの瞳がいつになく優しく
て。

ほっとした。

ほっとしたら、強ばっていた自分の体から力が抜けた。
涙がでそうになった。

よかった。

ゆずるが一緒でよかった。

大丈夫。

俺は一人じゃない。

大丈夫――。

「絶対……」

直久は思わずつぶやいた。

「絶対、三人で帰ろう」

優香を見つけて、誰も欠けることなく。

無事に、皆で帰ろう。

――帰るんだ。

自然と、ゆずるの手を握る右手に力がこもる。するとゆずるがその手を握り返してくれた。

「ああ。皆で帰ろう」

ゆずるは、柔らかな笑顔になった。

その瞬間、直久は自分の胸が跳ね上がるのを感じた。

ゆずるが笑ってる。

自分に笑いかけてる。

直久の記憶をいくら遡っても、ゆずるのこんな花のような笑顔にぶち当たることはない。

初めてかもしれない。

なんだか、よくわからないが、すごく嬉しくなった。

初めて、あの恐ろしい姉に褒められた時のような。

クラス中の女子に「直久くんてカッコいい！」とか言われた（妄想）時のような。

胸の中が、ぽかぽかと暖くなるような、そんな気持ちだった。
だから、直久も満面の笑みになった。

「よしっ！ この直久様に任せておけっ！！ みんなで帰るぞおーっ！！」

繋いでいた手を突き上げて叫んだ。

何でもできるような気がした。

今なら、何も怖くない気がした。

「ば、ばか！ でかい声を出したら、夢魔に見つかるだろう！」
後から、ゆずるのそんな小言が聞こえてきたが、気にしない。

大丈夫。帰れる。

帰るぞっ！！

「優香、待ってろ！ 直兄ちゃんが今、迎えに行ってやるぞっ！」
直久が勢い余って走り出した。

今度は直久に引っ張られるようにしてゆずるが走り出した。

「待て、そっちじゃない！ こっちだ！」

「なぬっ！ 早く言えよ」

「お前が勝手に走りだしたんだろうが」

この時の直久には、分かっていなかった。

直久のその笑顔が、ゆずるにどれほどの力を与えていたのか。
今の直久の存在が、どれほどゆずるに勇気を与えているのか。

直久がそれを知るには、まだまだ時間を要するようだ。

鬼ごっこ(3)



何処までも続くと思われた暗闇は、ゆずるの予告通り、突然終わりを迎えた。

直久たちは、目の前に突如として出現した金属の引き戸の前に仁王立ちしていた。

「開けるぞ」

そう言ったのは直久の方だった。

すっかり元気というか、普段の調子を取り戻した彼は、若干の躊躇を見せたものの、気持ちよいほどの思い切りの良さで、その引き戸を開け放った。

だが、すぐに直久は小首を傾げた。扉は見た目よりも重さが感じられず、襖でも開いたかのような感触を覚えたのだ。肩すかしをくらった気分である。

(軽っ!! ゆ、夢だからかっ!?)

一瞬自分が怪力になったのかと錯覚しそうになったが、それもすぐにどうでもよくなった。

扉の向こうに広がっていたのは――。

「体育館……?」

直久の記憶にもしっかりと残っている。直久たち双子、そしてゆずるが小学校の卒業式を行ったのも、この場所なのだから。

「行こう」

ゆずるは、呆然とする直久の横をすりぬけて歩きだした。慌てて直久もそれに続く。

と、その瞬間。

——ジャジャン!!

まるで、直久たちの入場を歓迎するかのように、ピアノの音が体育館の空気を揺らした。

「な!?!」

慌てて直久は視線を走らせる。その視線も、すぐに異様な物に吸い込まれるようにして動けなくなった。

体育館のステージのグランドピアノの前に、真っ赤な物体がある。いや、真っ赤な頭をして人物がいる。かなり長身に見えた。

緑、黄色の洋服で全身を被うその様はどこから見ても異様だ。目がチカチカしそうな原色の配色に直久は目眩さえ起こしそうになった。

(何だ、あれ!!)

その原色の人物、否、物体が、突如激しく動き出した。

『ねこふんじゃった　ねこふんじゃった

ねこふんづけちゃった　ひっかいた

ねこひっかいた　ねこひっかいた

ねこびっくりして　ひっかいた』

突然のピアノ弾き語り。曲目は、『ねこふんじゃった』というチョイス。

直久もゆずるも呆然となった。

いったい何が始まったというのか。

まったく状況が飲み込めない中、なおもそのリサイタルは続く。

『わるいねこめ　つめをきれ

やねからおりて　ひげをそれ

ねこ　ニャーゴ

ニャーゴ　ねこかぶり

ねこなでござえ あまえてる

ねこごめんなさい ねこごめんなさい

ねこおどかしちゃって ごめんなさい

ねこよっといで ねこよっといで

ねこかつぶしやるから よっといで』

世辞にも美味しいとは言えないダミ声がビリビリと空気を揺らして
いるせいか、鳥肌が立ってきた。

（そ、そんな歌詞なんだ……）

この状況をどうしたらいいものか。一緒に歌った方がいいのか、
踊った方がいいのかな。

そんなことを本気で悩み始めた直久は、ゆずるに救いを求めて、
その顔を覗きこんだ。

が、すぐに、はっと息を飲む。ゆずるの表情はいついなく険しい
ものだった。

「ゆずる？」

「こいつだ」

ゆずるが唸るように言った。

「こいつが、夢魔だ」

「え？ 夢魔ってつまり……」

「優香を連れ去った張本人だ」

「ええっ!？」

だって、出会ったらまずいんじゃないかったか？

ゆずるの力でも敵わないって言ってなかったか？

つまり。

これって。

（大ピンチーっ!？）

がーんと、後頭部を殴られたような衝撃が、直久の全身を駆け巡
った。

しかしながら、直久が機能停止していたのは数秒のこと。こうい

う時の直久は頭の回転が恐ろしく速い。すぐさま踵を返した。

「やばくない！？ いや、やばいって。帰ろう。今なら間に合う。

気持ちよさそうに歌ってる間に、お暇しようぜ！ そうしよう、引き返そう」

ところが、直久の首根っこをゆずるが引っ搦む。

「無駄だ。とっくに気づかれて、閉じ込められた」

「ひえええええ」

気持ちよさそうに歌う夢魔の声が、さらに直久を恐怖に凍りつかせていく。

『ねこふんじやった　ねこふんじやった
ねこふんづけちゃった　とんでった
ねことんじやった　ねことんじやった
ねこおそらへとんじやった』

あおいそらに　かささして
ふわり　ふわり　くものうえ

ゴロニャーゴ　ニャーゴ　なっている
ゴロニャーゴ　みんな　とおめがね

ねことんじやった　ねことんじやった
ねこすつとんじやって　もうみえない

ねこグッバイバイ　ねこグッバイバイ
ねこあしたのあさ　おりといで』

「直！」

ゆずるが急に直久の腕を引っ張って体育館中央へと導いた。
どうしたのかと背後を振り返る。

猫だ。

直久の背後にいつの間にか黒ネコが座っていた。
どこからきたのだろう。ずっと直久たちの後を追いかけてきていたのだろうか。

首をかしげていると、すぐ隣でゆずるがさらに体をこわばらせるのがわかった。

何だろうとゆずるの視線を追う。

「なっ！」

右も左も黒ネコが座ってこちらを見ている。一匹ではない。
まさか、と思い背後を振り返る。

——増えてる！

「囲まれた」

ゆずるの声がかすかに震えていた。
あっという間に、直久たちを中心にして、円を描くように黒ネコの輪ができていた。しかもその輪は、じりじりと詰め寄ってくる猫たちによって、徐々に狭まっている。

『ねこふんじやった　ねこふんじやった
ねこふんづけちゃった　とんでった

ねことんじやった　ねことんじやった
ねこおそらへとんじやった』

ピアノの曲は、そのリズムをだんだんと早め、大きくけたたましくなっていく。

そのリズムと同調するように、直久の心が逸る。
気がつけば、体育館は黒ネコで埋め尽くされている。
賭けてもいい。絶対ただのネコじゃない。

直久の野生のカンが警報を鳴らしていた。

逃げる！

逃げるべきだ！

でもどうやって！？

背中をイヤな汗が、つーつと滴り落ちていく感覚に、全身の肌がざわめいた。

「だから猫は嫌いだ」

ぼそりとゆずるが呟いた。

「ええっ。今そんなこと言ってる場合っ！？」

「ふん。我が家は代々、犬派なんだよ」

毒づきながらも、ゆずるの喉がなる音が聞こえた気がした。

その時、ネコたちの前進が止まった。

同時に、ピアノの音もぴたりと止む。

気持ち悪いほどの静寂が訪れた。

「……」

直久とゆずるが息を飲んで見守る中、夢魔はゆっくりとピアノから離れ、ステージの真ん中まで歩くと、こちらに向かって深々と頭を下げた。

「ご静聴ありがとう」

抑揚のない少年のような声でそう言い終えると、夢魔は大きく跳躍し、あっという間に直久たちの目の前に降り立った。

「こんにちは。ボクはパノン」

そう挨拶する夢魔の前に、直久は呆気にとられた。

真っ赤な髪の毛、白すぎる顔にトマトのような鼻が付き、目の周りには黄色の星が描かれている。

（夢魔って……ピエロだったのか！）

世の中のピエロが全て夢魔であるかのような直久の発言ではあるが、確かにそれはピエロの姿に酷似していた。

「ねえ、ボク、君のこと知ってるよ」

夢魔は、完全に直久を無視するように、ゆずるだけに熱い視線を

送っている。

「君、小夜の臭いがするもん」

「……………」

（小夜？ 小夜って、あの小夜か？ うちのご先祖様の？）

直久が眉をひそめるのと同進行で、ゆずるの顔がさらに陰しくなっていく。

「ボクって天才だね。あの女の子を食べようと思ったんだ。だって、小夜の血を引く人間を食べれば、ボクは強くなるからね。そしたら、もっとすごいものを捕まえちゃった」

「ということは、優香はまだ無事なんだな」

ゆずるが切り返した。

「今、鬼ごっこしてるんだ。飽きたら食べようと思ったんだよ。でも、飽きる前に君が来た。君がもってるれ力はあるの？ 比じゃないよね。だって君は、九堂家の後継者だろう？」

ゆずるは返事の代わりに、夢魔を睨みつけた。

「あれ、でも変だね」

そう夢魔が言い放った瞬間、その姿が消えた。いや、消えたように見えた。

その動きが速すぎて分からなかっただけで、一瞬にして、夢魔はゆずるの目の前へと移動していた。

「うわっ」

突然、目の前に現れた不気味な顔に、直久は思わず声をあげ、ゆずるも息を飲んだ。

しかも目線は長身の直久とほとんど変わらないことにも驚かされた。

声が少年のようだから、かつてに子供のピエロだと勝手に思っていたが、中身はともかく、見た目は大人のナリをしているらしい。

「君、本当に後継者なの？」

ゆずるがとっさに、何か術を唱え、胸元からお札を取り出した。が、その時には、再び夢魔は少し離れた位置に移動してしまう。

「あれあれ？ おかしいな」
もったいつけるように言うと、夢魔はくるりとこちらを振り返った。

「だって、君——女の子だよね」

7 最高に使いたくない最後の手段

7 最高に使いたくない最後の手段

「お前、バカだろう」

直久は思わずソレを指さしながら言った。

このけったいな格好をした、奇怪な物体は、何をもったい付けて言ったかと思えば――。

（誰が女だって？）

仏頂面のゆずるのどこをどう見て、女だと言うのだろうか。

確かに、ゆずるは自分に比べれば細身だし、背も低い。

だが、細身なのは、体育の授業すら見学するという運動不足のなせる技だし、日の当たらない神社の境内で祈祷してばかりいれば、真っ白な素肌になるのは至極当然というものだ。

背丈だって、どちらかというとき長身の部類に入る直久たち双子より低いだけのことだ。

なるほど、ゆずるに男臭いところは無い。それは確かだ。だが、果たして女子っぽい所があるかと言えば、これまた、微塵も見当たらない。百人に聞いたなら百人が納得するはずだ。こいつは男だ。

（ったく。ゆずるが女だったら俺も女だっつうの！）

冗談も休み休み言え。

いや、冗談だとしたら、なんて出来が悪い。自分だって、もっとましな冗談を考える。

ああ、嫌だ嫌だ。

なんだか頭が痛くなってきた。

直久は、深く深くため息をつくとき、首を左右に振り、諭すように言った。

「ちゃんと見えてねえんだろう？ お前さ、悪いこと言わないから、その悪趣味な化粧やめたら？ 目の周りに星とか書いちゃってるから、よく見えないんだぜ？ だいたい、その赤い鼻とか、付ける意味あんの？ 邪魔だろう、どう考えても。でかすぎだって。下見えてるのか？」

だいたい、その格好はなんだ。

パジャマにしては趣味が悪すぎる。右半身と左半身で色が違う。赤と緑に黄色ときたら、お前は信号かつ！ と叫びたくなるじゃないか。

「悪いことは言わないから。もうちょつと、ましな格好した方がいいよ。俺が言うのもなんだけど、見た目で信用を無くすこともあるんだぜ。わかるか？ どんなすごい真実だったとしても、その格好で言ったら、だくくくくくれも信じないってことだ。ま、今回ののは全くもって、ネタ自体がヒド過ぎて、信じる信じないとかいう以前の問題だけだな」

したり顔で直久が言いきったところで、初めて夢魔の視線が直久の瞳を捉えた。

「――っ！」

睨まれたわけでもないのに、その冷たい漆黒の瞳に、一瞬、金縛りにでもあったように、指一つ動かさなくなった。

(な……なんだ……)

直久には夢魔の強大な魔力は見えていない。だが、確かに体が反応していた。

異様な威圧感。夢魔の視界に入っただけで、自分と夢魔の間にある空気が一瞬で凍りついたのを感じた。

目が離せない。呼吸すらできない。

視線一つ動かせないほどの恐怖が、一気に体を駆け上がってくる。

「君………誰？ うるさいんだけど」

明らかに不機嫌そうに夢魔が言った。まるで、おもちゃを目の前にして、取り上げられた子供のような表情だ。

「それに、君からは美味しそうな匂がしないしねー」

すつと夢魔の視線が外れた。すぐに、体に自由が戻る。

「っ……」

震える肺で、どうにか息を吸った。荒くなった呼吸をなんとか落ち着かせようとするが、難しい。

（び、びびった……）

蛇に睨まれた蛙の気持ちが分かったような気がした。できれば、一生分かりたくなかった。そうも思った。

嫌な汗が背中を流れていくのを感じながら、夢魔と対峙し続けるゆずるに目をやった。

ゆずるはただ無言で夢魔を見据えている。じつと、ただ、相手の出方を見ているようにも見える。

九堂一族で一番の力を持つゆずるですら、かすかな隙も見せられない、そんな緊張感の中にいるのだ。自分が動けなくなるのも当然だ。いや、下手をするとあの一瞬で自分の心臓が止まっていたかもしれない。そう思うとぞっとする。

だが、ゆずるは涼しい顔で夢魔を睨み続けていた。その凜とした横顔に、頼もしさすら感じる。

「君が本当に後継者だとすると、あの子はどこへ行ったんだい？

死んじやったの？ もしかして、あの当主のお爺ちゃんが死んで、

あの子が後を継いだのかな？ そんなはず無いか。だって、あのお

爺ちゃんの匂い、まだするもんね」

「……あの子？ 誰のことだ」

ゆずるが唸るように言った。

「名前なんて知らないよ。ちょっと前に、暇だったから君たちの家に遊びに行ったんだ。そしたら、ギラギラした目のあの子がボクに言ったんだよ。もう少し待てって」

夢魔は、その時のことを思い出したのか、クククと小さく笑った。
「もう少ししたら子供が生まれるから。そしたら、ボクに食べられてくれるって言ってたんだ」

「……子供……？」

そう呟いたゆずるの顔が、見る見るうちに険しくなっていく。

何か思い当たることがあるのだろうか。直久も必死に記憶の本棚をひっかきまわしてみたが、もともと在庫の少ない本棚だ。全く見当がつかない。

首をかしげるだけの直久を置き去りにして、夢魔は尚も話続ける。

「その子の言うことを聞く必要はなかったんだけどね。ボクも油断したんだ。その子は、変な力でボクに命令した」

「……ことだま言霊」

「君たちはそう呼ぶんだね。ボクは術にかけられてしまって、その子の言う通りにしか体が動かなくなってしまったんだよ。だから、そろそろ約束の時間かな、と思って君の家に遊びに行こうとしたんだ。そしたら、美味しそうな女の子に出会ったんだよ」

美味しそうな女の子——それが優香か。

いくらなんでも、その言い草はどうだろう。

それまで黙って聞いていた直久も、優香をエサのように扱う夢魔に、苛立ちを覚えずにはいられない。

だが、ゆずるは直久とは違うところで、怒りを覚えたらしい。

「ならば、その“男”のせいで、優香はこんな目にあっただってことか」

「あれ？ ボク、その子が男の子だって言ったわけ？　すごいね、正解だよ！」

夢魔はわざとらしく、パチパチと拍手して見せた。

その様子に苛立ちを増長させられながら、直久もあれ？　と首を傾げる。

（男？）

言霊を使う、一族の男。

何か思い出しそうで、思いだせない。

「てつきりボクは、彼が後継者って呼ばれていると思ってたよ。まあ、その前に、あのお爺ちゃんが、まだ生きてるとは思わなかったけど。けっこうシブトイよね」

（確かにシブトイっ）

夢魔のくせに、意見が一致した。直久は若干複雑な気持ちを味わいつつ、さらに夢魔とゆずるの会話に耳を澄ました。

「まあ、あのお爺ちゃんも後継者が君じゃ、死ぬに死ねないか。あの子は、かなり強い力を持っていたのに、君じゃねー。あの子の足元にも及ばないよ、君」

「……」

ゆずるの唇が小さく震えているのに直久は気がついた。よく見れば、顔も真っ青だ。

（待てよ）

ゆずるよりも強い力を持った、後継者になり得た男。

ゆずるがこんなに過剰に反応を示す男。

（まさか――）

直久の頭の中で、たった一人その答えに該当するだろう人物が導き出される。

しかし、確証はない。

その人物が言霊という、最大最強の禁じられた能力を持ち合わせていたということも聞いたことがない。

知るわけがない。直久はその人物に一度も会ったことがないのだから。

だが、他に該当する人物はいないはずだ。

夢魔が出会った“男”。

もうすぐ子供が生まれると言った“男”。

直久が生まれる前、ゆずるを身ごもったゆりを残して姿を消した――ゆずるの父親だ！！

「さーてと」

雷に打たれたように動けなくなった直久たちを引き戻すかのよう
に、夢魔がのん気な声を出した。

「ボク、お腹空いてきちゃった」

夢魔は、一歩足を前へ繰り出した。

ギクリとなったゆずるも、さっと直久を背中に庇うようにして一
歩前に出る。

（ゆ、ゆずる……）

——『夢の中で夢魔と鉢合わせしたら、危険だね。夢はヤツ
らのテリトリーだから、あっという間に食われるかもしれない』

弟が笑顔でそう言っていたのを思い出した。喉がごとりと鳴る。

（く、喰われるって、まじかよ!?!）

夢魔がまた一歩前へ進む。

その目は、明らかにゆずるしか見ていない。

その夢魔の口元がゆっくり、ゆっくり、左右に引き上がっていく。

（——っ!）

言いようのない恐怖が襲ってきた。

最高に使いたくない最後の手段(2)

笑ってる。

嬉しそうに笑ってる。

余裕なんだ。あいつは、ゆずるの力なんて、これっぽっちも恐れていない。

そんなに、力の差があるってことなのか。

——死。

その一文字が頭を埋め尽くしていく。

想像してしまふ。せずにはいられなかった。

文字通り、喰われる自分の姿を。

自分の腕や足に噛みついて。

むちゃむちゃと肉を喰いちぎり。

ずるずると血を吸り……びしゃびしゃと内臓を、骨をしゃぶるそのおぞましい姿を！

「うっ……」

急激に胃が熱くなり、強い吐き気がこみ上げて来たが、なんとか堪える。

でも、体の震えを止めることはできそうにない。

怖い。

そんな言葉では言い表せないほどの恐怖に、言葉も出ない。

ふと、ゆずるが呟いた。

「大人しく——喰われてやと思うなっ！」

ゆずるが両手を胸の前で、パンと打ち鳴らし、強力な上昇気流が巻き起こった。さすがの直久も、その風が結界を張る時に起こる現象だということは知っている。

ゆずるが張る結界ならば、一族最高級の結界だ。これを破れる強

力な妖魔は、そういない。そして、強力な妖魔だとしても、小さな穴を開けて、結界をこじ開けるまで、時間がかかるはずだ。

（そうか、時間稼ぎだ）

直久はピンときた。

その間に、ゆずるの使役する妖狼たちが、優香を見つけ出してくれれば。そうすれば、狼たちはこっちに戻ってくる。

（助かるっ！！ 助かるんだっ！！）

直久は、ぐっと歯を噛みしめ顔を上げると、まっすぐ妖魔を睨んだ。だが、妖魔はまったく答えていないようにも見える。逆に、妖魔の表情は、余裕の色が濃くなった気さえした。

気のせいだろうか。

気のせいであってほしい。

直久には、そう祈るように妖魔を睨み続けることしかできなかった。

「ふーん、結界はったの？」

面白いことするなあ、と言いながら、こちらをじっと見ている。じっと見ている。

結界に不完全なところが無いか、探しているようにも見えた。

でも、ゆずるが作った結界だ。完璧に決まっている。

（どうだ、手が出ないだろう！！ うちの、ゆずるをナメてもらっちゃ困るぜっ！！）

普段、自分がこれほどまでゆずるを頼りに思ったことがあっただろうか。

ゆずるの力を、ゆずる自身を信じたことがあっただろうか。

大丈夫。

このまま、妖魔が手だしできないでいる間に、式神たちがゆずるの妹を連れて戻ってくる。

そうに決まってる！

直久が自分たちの勝利を確信して、思わず口元を緩めた、その時だった。

「すごい、きれいな結界だね」

夢魔はぼそつと呟いた。

そして――ニタリと笑った。

「でもさ、忘れてない？　ここ、ボクの住処だよ」

ゆずるの横顔が、ギクリと強ばるのが分かった。それと同時に、夢魔はパチンと指を鳴らした。

次の瞬間。

まるで空気が爆発したのではないかという大きな音が、響き渡った。

この音には覚えがある。今冬、ゆずるの張った結界が、壊れた現場に居合わせたことがあったのだ。その時に、同じように、風船が破裂したような軽い爆発音がしたのだ。

（まさか……そんなにあっさりと結界が……）

直久の悪い予感、すぐに肯定されることとなった。

ずっと夢魔は視界から消えたかと思うと、一瞬にしてゆずるの目の前に現れた。

「――っ!!」

目視できないほどの速さで、ゆずるの首を片手で掴むと、夢魔は嬉しそうに言った。

「今のボクに、出来ないことはないんだよ。君にはできないことだらけだろうけどね」

言い終わるや否や、ゆずるの体を腕一本で持ち上げてしまう。

「ゆずるっ!!」

ゆずるは首を絞められた状態で宙に浮きながらも、なんとか自由になろうともがいている。苦しさに顔を歪め、夢魔の手を振りほどこうと、喉元を掻き爪っていた。

「やめろっ!!」

直久は、夢魔からゆずるを引きはがそうと手を伸ばしたが、その瞬間にもものすごい力で吹き飛ばされた。放物線を描いて着地する直久を待ち構えるように、黒猫の大群がニャアニャア騒ぎ立てる。

体育館の床に叩きつけられた直久が、数十センチスライドして止まったところへ、いっせいに黒猫が押し寄せた。

「うわあああ」

黒猫たちは、鋭い爪と牙をたて、直久を傷だらけにしていく。噛みちぎられるほどの力はない猫でも、地味に痛い。

「いててて。やめろ、おいっ。いてっ！ 顔はやめてくれ。いてててっ」

なんとか猫を振り払って立ち上がったものの、次から次へと猫が飛びかかってくる。

その猫を引っぺがしながら、ゆずるのもとへ戻ろうと試みた。数十匹が足にしがみ付いていて、思うように動けない。

「だーっ！ 邪魔くせえっ！ ゆずるーっ！！」

このままじゃ、ゆずるが喰われてしまう。

「ゆずるーっ！！ しっかりしろ、ゆずるっ！！」

必死で叫んだ。

他にできることが思いつかない。

夢魔に首を絞められ、今にも窒息しそうなゆずるを前に。

何もできない。

出来ることが無いっ！

「くっそおっ！！ 先詠っ！！ 早く帰ってこいっ！！」

ゆずるの死は自分の死。

ひたひたと近寄ってくる死に、抵抗することができない。

強大すぎる力に、虫けらのように殺される自分。

自然界の掟に従い、強き者の糧となる自分。

しょうがない、できないし。

無理。

もういいよ。

そんな言葉を簡単に吐いていた自分を思い出す。

諦めるのか？

今、ここで何もしなければ、ゆずるが死んでしまう。
全てが終わってしまうんだ。

ゲームみたいにリセットできる人生ならそれでいい。

まだ何もしてないのに？

でも、今、ここで何の抵抗もせず、ただ死を受け入れるのか？

（よく考えろ）

まだ何もしてない。

（できることが、何か——あるはずだ）

まだ終わってない。

——『直ちゃんがケガをすれば、その痛みはボク』にも届くようにするんだ。そうすれば、どんな危険な目にあっているのか、すぐに分かるし』

ふいに弟の声が脳裏によみがえった。

（そうだ……その後、カズはなんて言った？）

——『目を覚まして欲しいって時は、直ちゃんをぼっこぼこに殴ってくれればいいわけだから』

（それだっ!!）

直久は、心の中で叫んだ！

自分の体を使って、この危機的状況をなんとか和久に伝える。それしかない。

でも、どうやって？

今、現在すでに、猫に体中、切り傷だらけにされてるが、和久はいっこうに力を貸してくれる様子が無い。

このくらいの傷では伝わらないということなのか、それとも、自分がコケたとは思われてないのではないだろうか。

つまり、自分の身に危険が及ぶほどの痛みが与えられないと、伝わらないのでは？

（俺に、死にそうになれってか！ 最後の手段すぎじゃねっ！？）
だが、今ここに、自分の体を瀕死に追い込むほどの武器も見当たらない。

それに、今ゆずると自分がこの世界から逃げ出したら、優香はどうなる？

ゆずるという大物を逃した夢魔は、怒り狂って優香を喰らうに違いない。

だめだ。

優香を見捨てて帰るなんてできない。

（こんちきしょうっ！！ どうしたらいいんだっ！！）

最高に使いたくない最後の手段(3)



『みーつけた』

少女はぎくりとなって体を震わせた。

『おい、兄貴。こんなところに優香いたよ』

その聞き覚えのある声に、優香はがばつと顔を上げる。その拍子に、隠れていた机に頭を勢いよくぶつけた。

「いたっ」

『……何してんだ？』

後頭部をさすりながら姿を現した優香に、声の主はカラカラと笑い声を上げた。

「炎刈っ!!」

『あん？』

燃えるような赤い毛並みの大きな犬が、優香を見上げていた。

「良かった……助かった……」

そう思った瞬間、体中の力が抜け、優香はへなへなとその場へたれこんでしまった。

『おい、大丈夫か？』

別の方から声が聞こえた。先詠の声だ。

『無事だったか。よくもまあ、喰われずに逃げ切ったなあ。あっぱれ、あっぱれ』

今度は風酔の声が、酒気と一緒に漂ってきた。

あれよあれよという間に、三匹の妖狼に囲まれた優香は、はたと顔を引き締めた。

(まさか……)

ここは夢の中。

あの夢魔が作った夢の中。

「あんたたち……本物でしょね」

あの夢魔が作りだした偽物なのではないかと思ったのだ。優香を油断させて、喜ばせたあと、絶望を再び植え付けるために。悪趣味な服を着た、悪趣味な顔の夢魔がやりそうなことだ。

「いいわ、本物かどうかテストよ！」

『ああん？』

小娘が何を言うか、というように大型犬サイズの妖狼たちは顔を見合わせた。

「いいから、質問に答えなさい！」

『なんだよ』

炎刈が渋々答えた。

「この世で一番怖いものは何だ！」

すると間髪いれず、三匹は同時に答えた。

『生意気な金髪の小娘』

『うちの姫さん』

『鈴香嬢』

優香は深々と頷いてみせた。

「……本物みたいね」

と、その時だった。

優香の持っている小さな布袋が赤く光り始めたのだ。

「お兄さま！」

優香が悲鳴にも似た声を上げたのと、三匹の妖狼が何かを感じ取ったように硬直するのが同時だった。

『ゆずるが危ないっ！』

『夢魔に出会っちゃったか』

『行こう。優香、居場所が分かるか？』

口ぐちに妖狼たちは言うのと、大型犬サイズから本来の大きさへと変身を遂げた。そのうちの、先詠の背に乗ると、優香は叫んだ。

「あっち！ 急いで！」
優香の指さした方向へと妖狼たちはいっせいに走り出した。



「お兄さまっ！！」

直久ははっとした。

突然、少女の声が聞こえたかと思うと、頭上から優香が文字通り降ってきたのだ。

「優香っ！！」

「え？ 直久！？」

「呼び捨てかよっ！」

「うるさいっ、ていうか、そこで何遊んでるのよ！」

叫びながら優香が、直久の方へと駆け寄ってきた。

「おお？ 何だ？ 猫がっ」

直久が驚いたのも無理はない。優香を恐れてなのか、優香と一緒に戻ってきているはずの妖狼を恐れてなのか、黒猫たちが一斉に退いていったのだ。

「何しに来たのよ、直久が来ても意味ないじゃない！」

「好きで来たわけじゃねえよ！ ていうか、あれ何とかしろっ！」

直久はゆずるを指さした。と、夢魔も優香に気がついたようで、こっちを見ていた。

「あれ？ 君も食べられに来たの？」

そう言った夢魔の口元が怪しく歪み、ニタリとしか表現できないような不気味な笑顔になっていく。

しかし幼くても、優香は立派に九堂一族の娘であった。

「ばっつっつかじゃないのっ！」

両手を腰にあて、ふんぞり返った姿勢で、そっくり放った小学1年生に圧倒されたのは、すぐとなりにいた直久の方だ。思わず少女から一步退いてしまう。

「うちのお兄さまが、あんたなんかに喰われるわけないでしょうっ！！ だいたい、このでっかい犬が見えないわけっ！！」

見えないよ、と思わず直久は突っ込みそうになった。それにしても……。

この威勢の良すぎる少女に、とある凶暴な金髪女性が重なって、急激に頭が痛くなってきた。

(……どうしてこう、うちの一族の女性陣は……。だって、コイツはあのゆり叔母さんの娘なはずなのに……)

と、その時、優香に気を取られた夢魔の隙について、ゆずるが叫んだ。

「直っ……逃げろっ！ 優香を連れてっ——ぐふっ」

しかし、再びきつく首をしめられ、最後まで言葉を紡げなくなってしまう。

「ゆずるっ！」

「お兄さま！」

反射的に叫んだが、ゆずるは苦しそうに顔を歪めただけだった。

そのゆずるを舐め回すように見つめ、舌舐めずりをしてから、夢魔が言った。

「君ね、うるさいんだよ。逃がさないから。君もあの子もボクのお腹の中に収まるんだ。もう、決まったことだよ」

直久は、あれっと思った。

さっきまでの余裕な声とは違い、明らかに苛立ちが夢魔の声に含まれているのを感じたからだ。

もしかして、夢魔は焦っているのではないだろうか。直久はそう直感した。

自分たち優香を取り戻した。

あとは夢魔から逃げるだけだ。倒す必要はない。ただ、全員で逃

げ帰ればいい。

——『今のボクに、出来ないことはないんだよ。君にはできないことだらけだろうけどね』

夢魔は確かにそう言っていた。

つまり、この夢の世界から出て、現実世界に戻れば、夢魔だって、易々とは手を出せないということではないか。それに、向こうには和久をはじめ、多くの味方がいる。次期当主の危機とあらば、一族指折りの者が集まって、夢魔と対峙するだろう。

この場から逃げれば、自分たちは助かる。逃げることを考えればいいだけだ。

夢魔もそのことに気がついているのだ。

言葉や態度では優越感たっぷりに見せているが、“逃げられてしまいかもしれない”そんな焦りを必死に隠そうとしているのではないだろうか!?

(帰れるぞっ!! 大丈夫だ、きっと帰れる!!)

直久の瞳がみるみるうちに輝きを取り戻していく。しかし、対照的にその横で優香の目はキツとつり上がっていった。

「いい加減にしなさいよっ!! あんたたちが、くっつっただらないこと言ってる間に、どんどんお兄さまの霊力が、あのピエロ野郎に吸い取られてるじゃないのっ!!」

明らかに、直久には見えない、妖狼に話しかけているのは確かだが、様子がおかしい。

しかも、“クダラナイ”に最大級の怒りがこもっている。直久は、若干6歳の少女の顔をビクビクしながら覗き込んだ。

「……ど、どうした?」

「狼たちが、動けないって言ってる。猫が嫌だって」

「なんだそれっ! 狼のくせに猫が怖いのかよっ!」

「ほんと、情けないっ!! でっかいだけの役立たずっ!! モッ

プにしてやるっ！」

（……なんか、狼たちがかわいそうになってきた……。いやいや、そんなことを言ってる場合じゃない。ゆずるをなんとかして助けなきゃっ！）

それまで必死に抵抗をしていたゆずるの腕から力が抜けた。まるでスローモーションのようにだらりと垂れさがる。

ついにゆずるは全ての霊力を夢魔に吸い取られ、ぐったりとしてしまっていた。

夢魔は意識がないことを確認するように、ゆずるの首を掴んだ手を左右に揺すった。まるで人形のように、ブラン、ブランとゆずるの体が揺れる。

「どうしよう！ このままじゃお兄さまがっ！」

優香の声が震え、大きな目が揺れはじめる。

「考えなきゃ……考えなきゃ……」

震える唇に左手を当てて思案しはじめる6才のいここにちらりと視線を送る。

直久にはその答えが一つしかないような気がしていた。

優香が今隣にいることが、何よりもの救いだった。

（今なら、逃げられる……けど）

直久は静かにこぶしを握り締めた。

そうだ。ためらっている時間などない。

一刻も早くゆずるを助けられる方法は——これしかない。

「優香」

「何？」

「お前の能力はなんだ？」

「具現化よ」

「はは、おあつらえ向きだ」

やっぱりそういう運命なんだ。

これを見越して、和久は自分をゆずるに同行させたんだろう。

ならば、きっとその後のことは、考えておいてくれてるはずだ。

大丈夫。

あとは、和久にまかせればいい。
やるしか——ないっ！

直久は、ぐっと拳を作った。

「ナイフ、作れるか？」

「ナイフ？ まさか、ナイフで夢魔と戦う気？」

何をバカなことを言いだしたのかという顔で優香がさらに口を開こうとした。すぐさま直久はそれを封じる。

「いいから、作れ」

優香の大きな目が直久が何を考えているのか、そもそも考えがあるのかを悟ろうと、射抜かれそうなほど鋭い視線を送ってくる。直久も、目を反らさずに優香を見つめ返した。

「……分かったわ」

何かを察したのか、優香はすっと目を伏せ、胸の前で両手を打ち鳴らした。そして、その両手を広げていくと、その手の中が眩しく光り、そして見る見るうちに光は刃物へと姿を変えていく。

「今の私の力では、具現化が三分も持たないわ」

「三分もいらない。すぐに片を付けるよ」

直久は、舌舐めずりをしながらゆずるをご馳走のように見つめている夢魔を睨みつけたまま、手渡された刃物を手に取った。

ズシリと重みを右手に感じて、手元に視線を落とす。

「——って、おい！ これ包丁じゃねえかつ！！」

「戦うなら大きな包丁のがいいかなっと思っ」

「俺を殺す気かつ！？」

「え？」

「いや、待て、いいんだ、死にそうにならなきゃなんないんだっ」
わけがわからないという顔の優香を置き去りにして、直久は包丁に映り込んだ自分の顔を静かに見つめた。

刃渡り20センチ。見るからに新品で、切れ味もよさそうだ。

まったくなんて立派なものを出してくれたんだ、我が従姉妹殿は。

直久は諦めという小さなため息をついて、不安そうに自分を覗き込む優香の小さな手を取った。

「いいか。何があっても、俺の手を離すな」

「待って。何をする気なの？」

妖魔退治では、大先輩である優香は、訝しげに眉を詰めている。無能な直久が、いったい何をしようというのか。何ができるというのか。そういう目だ。

それでも直久は、まっすぐに優香の目を見て言った。

「俺とゆずるは、カズが起こしてくれる。俺と一緒に、お前も引き戻してもらうんだ。だから、何があっても、俺の手を離すな。いいな？」

和久の名前が出た途端、優香の顔付きが変わった。そして深く頷く。

「……わかったわ」

直久は、左手で小さな優香の手をしっかりと掴むと、右手で手渡された包丁を強く握り直した。

（ぜってー、いてえぞ。こんなでっかい包丁で刺したら、めっちゃ痛いって）

恐怖で勝手にが膝が笑ってきた。

嫌な汗が噴き出してくる。

（……やるっきゃない）

わかってる。わかってるが……。

ちらりとゆずるに目をやる。

力なくうなだれている。躊躇してる時間は微塵もない。

自分の心臓の音が、どんどん大きくなってくる。

ドクン。

ドクン。

まるで時を刻むように。

自分の心臓の音と、荒く息をする音しか聞こえなくなってくる。

（くそうっ！！ ビビってる場合じゃねえつつうのっ！）

直久は、ぎゅっと目をつぶった。額は、いつしか汗でびっしょりになっていた。

大丈夫。

大丈夫。

カズが何とかしてくれる。

あとは、カズが――っ。

「こんちきしよおおおおおお」

直久は、勢いよく自分の胸を包丁で突き刺した。

最高に使いたくない最後の手段（4）



まるで、生まれ出た瞬間の赤子のように、ゆずるは一度に大量の息を吸い込んだ。急激に入ってきた空気に体がびっくりしたのか、ベッドの上で転げまわるようにして、咳き込んでしまう。

涙目になり、呼吸を整えながら、生きている自分を実感した。

空気ですら、体や目に沁みるのが初めてなら、こんなに死を意識した戦いも初めてだった。

自分は死んでいてもおかしくなかった。それなのに、こうして生きています。

——まだ、生きている。

しかし本能的に、体は警戒を解こうとしない。自分の置かれた状況を把握しようと勝手に体が反応した。

なんとか頭を動かしてあたりに視線を送る。

最初に目に飛び込んできたのは、可愛いピンク色のカーテン

——優香の部屋だ！

（——帰って来たのか？）

にわかには信じられない。

頭の中で、『どうやって？』という言葉が答えを求めてさまよう。

夢魔に捉えられた自分は、なんの抵抗も出来なかった。

どうすることも出来ず、朦朧とする意識の中で、優香と直久に逃げろと叫んだ所まで覚えている。

（そうだ、優香——）

なんとか半身を起して、優香の存在を確認しようとした。

「——……」

声が出ない。

体も重い。

霊力の消耗を嫌でも思い知らされる。

確かに、ゆずるが出会った妖魔の中で、間違いなくあの夢魔は最強であった。だからこそ、一族の者は皆、退治できずにやり過ごしてきたのだろう。それには同意せずにはいられない。

どうすることもできないのだ。

逃げる以外には、生きて戻ってくる方法はなかった。

だがどうやって逃げてきたのだろうか。

優香か？

あの子に、それほどの力があるということだろうか？

潜在的に、強い力を持っていることは分かっていたが、あの夢魔から逃げられるほどの力があるとは思えない。

と、その時、混乱したゆずるの頭の機能を一瞬で停止させるような悲鳴が聞こえてきた。

「直ちゃんっ！！」

はっと、声の方へ反射的に首を回す。和久の声だ。

「直ちゃんっ！！　しっかりしてっ！！」

「直久っ！！」

自分が寝かされていた優香のベッドのすぐ下に和久と優香の姿があった。

和久は強ばった顔で何かを叫んでいた。和久の陰から、だらりと垂れ下がって揺れる誰かの腕が見える。

その横で、優香が大粒の涙をこぼしながら、誰かを揺すっていた。ゆずるは、ぼーっとする頭のまま、その二人を眺めやることしかできない。

あれは誰だ？

何が起きている？

なんで優香は泣いているんだ？

疲労のためか、ひどい頭痛のする中、必死に海馬をフル稼働させ

る。

そうだ。

あの時、確かに自分は聞いた。

直久の魂から出たような叫び声を――。

「…………お…………？」

かすれた声が零れた。

なぜあの夢魔から逃げられたのか？

答えは一つしかない。

優香の能力が爆発的に開花したわけじゃない。

そんな方に一つの可能性より、確実に逃げられる方法は――…………。

「直っ！」

何かに駆り立てられたように、ゆずるは直久に駆け寄った。

真っ青な顔で微かに息をする直久が、和久の腕の中にいた。

「くっ……………」

優香が揺する振動に、顔を歪めながら直久が呻いた。

その間も、直久の胸から、ドクドクと鮮血が流れ出てくる。その

赤い色にゆずるの視界も染まっていくような感覚を覚えた。

刺したのか！？

自分で胸を、こんなに深く――刺したのか！？

「この、バカっ！！ 手加減しろよっ！！」

ゆずるは思わず叫んだ。

確かに他に方法はなかった。一緒に居たのが優香なのだから、拳銃か刃物か何かを具現化して、自傷行為に及ぶのは至極簡単に思いつくだろう。その痛みが和久に届くと知っているのだから。

だけど――！！

「足を刺すとか、腕を折るとか！ 方法はいくらでもあっただろう！ 胸を一突きするバカがいるかっ！！」

声の限り叫びながら、ゆずるは直久の患部に手を押し当てた。傷穴など判別できないほど鮮血が次々に溢れてくる。

「駄目だ！ 俺のために死ぬなんて許さない！！」

懸命に両手で傷穴を押さえているのに。吹き出す血の量はいつこ
うに減らない。

（止まれ！！）

とっさに心の中で叫び、霊力で治癒しようと、両手に意識を集中
する。

しかし、血だらけになった手のひらからは、今にも消えそうな弱
い発光しか起こらない。

（くそっ！！）

もう、力がほとんど残ってないのだ。

刻一刻と直久に歩み寄る“死”の影に、焦りが募る。

（止まれっ！ 止まれ、止まれっ！！）

残る霊力を絞りだそうと、全神経を集中させた。

死ぬのは自分だったはずだ。直久じゃない。

直久が死ぬなんて駄目だ！！

誰かっ！

直久を——誰か助けてっ！！

「ゆずる」

誰かがゆずるの肩に手を置いた。反射的に振り返る。

「どきなさい」

柔らかな色を宿す、静かな瞳に捉えられた。

「貴樹兄さん……」
たかき

直久たち双子の実姉の夫、貴樹がゆずるを見下ろしていた。

「俺に任せろ」

落ちついた低音が、ゆずるの耳を通して、しみわたってくるのを
感じる。

きっと和久が彼を呼んでくれたのだ。

貴樹には、強力な治癒能力がある。その能力は、一族の誰もが足
元にも及ばないほど、桁違いに強力だった。

ゆずる自身や、当主であるゆずるの祖父、他の一族の者も、多少
の治癒はできる。

が、自分にしか使えなかったり、切り傷を直す程度だったり、その強弱はまちまちだ。彼のように、完璧に治癒できるものは、三百年に一度の逸材だった。

「心配するな。必ず治す。直久を殺したら、俺が鈴香に殺されるかな」

ほほ笑んでるわけではない。淡々と、呟くように言葉を繰り出す貴樹の背中が、本当に広くて大きくて。

ゆずるは徐々に自分の凍りついた心が解かされていくのを感じた。大丈夫。

貴樹に癒せない傷はない。

自分を落ちつかせるために、深く息を吐く。

（しっかりしろ。そんなんで自分に当主が務まると思っているのか。皆を守り導く当主になれると思っているのか！）

ゆずるは自分に言い聞かせるように心の中でつぶやくと、すっと顔を上げた。

貴樹の手元は、眩しいほどの青白い光を放っている。だが、直久の傷は思ったより深いようで貴樹は額に汗をかき始めていた。

ここではダメだ。ゆずるはそう直感した。

「貴樹兄さん、直を本堂に運びましょう。ここより治癒が早くなる」
貴樹は静かに頷いて見せた。

「貴樹兄さんはそのまま治癒を続けて。俺が兄さんと直を、瞬間移動で飛ばします。そのくらいの力は俺にもまだあるはずだ」

再び貴樹が頷く。それを確認してから、ゆずるは和久に向き直った。

「鈴香ちゃんは？」

「リビングにいるよ。ゆり叔母さんと結界を強化してる」

「わかった。カズも母さんたちと一緒に、優香とこの家の結界を。優香に俺が張った結界は完全に破壊されてる。まだ夢魔が追ってくるかもしれないから」

和久が深く頷いた。その横で、夢魔が追ってくる可能性を指摘さ

れて、優香が不安そうにこちらを見上げている。

「優香。母さんに元気な顔を見せてあげるんだ」

言いながら微笑んだつもりだった。でも、もともと笑うのが得意でないのに、優香の心情を思うとうまく笑えるわけがない。

しばらく寝られない夜が続くほど、怖い思いをしたはずだ。

賢いし、しっかりした子供だが、優香はまだ六歳の女の子だ。

確かに一族の子供は、他の子供とは比べられないほど危険な目には合っているが、死を意識したのは初めてに違いない。

（優香……）

このまま優香を置いて、この場を離れるのは気が引けた。

いっそ優香も本家につれて行くべきか？

いや、それをしたら、本家からこの家に戻ってきた時に、待ち伏せされて命を奪われる。

それよりも、この家ごと結界を張って、夢魔の目から隠す方がいい。

結界師である母と、攻撃型の和久や鈴香が居れば、なんとか夢魔に邪魔されずに結界を張ることが出来るだろう。

わかつている。わかつているが、今にも自分の胸に飛び込んで泣きだしたいのを我慢している妹を思うと、居ても立ってもいられなくなる。

そんな直久を気遣ってか、六歳の妹の方がふんわりと笑った。

「直久を元気にしてあげてね」

胸が痛かった。

瞼が熱くなるのが分かった。

ごめん、優香。

頼りない後継者で、ごめん。

怖い思いをさせて——ごめん。

「……わかつてる」

優香の頭をそつと撫でてやった。

齒を食いしばると、ゆずるは顔を上げた。

「行こう」

数秒後、あたりを眩しい光が包み込み、ゆずると貴樹、そして直久の体がある場から消えた。

8 探しモノは何ですか

8 探しモノは何ですか

数秒後、ゆずるたちは薄暗い朝霧神社の本堂に現れた。照明を付けなくても、貴樹の放つ青白い光で、隅々まで見渡すことができた。貴樹の両手から放たれるその輝きは、明らかに優香の家にいた時よりも強さが増しており、ほんのりとした暖かさまで感じられた。

この朝霧神社の、ある一角は、一族の者の霊力を増幅させる触媒の役割をはたしている。だからゆずるは、この地へ移動してきたのだ。

「よし、もう少しだ。がんばれ、直久！」

クールな貴樹には珍しくその顔に興奮をのぞかせている。貴樹の声に誘われるように直久の顔をのぞきこめば、確かに赤みがさしてきた。

（よかった……）

ゆずるは、小さく息を吐く。

もう大丈夫だ。

そう思ったら、急に、どっしりとした重力を全身に感じた。同時にすーっと頭から血の気が引いていく。ふらふらとなって、尻もちをついてしまった。

「ゆずる!？」

何事かと心配した貴樹が、反射的に腰を浮かせた。

「……大丈夫。俺はなんともないから……」

くらくらする頭を片手で支えながら、やっとの思いでそう言った

ものの、座っているのが精いっぱいだった。一瞬でも気を抜くと意識を手放してしまいそうな、気だるさと眠気が洪水のように押し寄せてくる。

「直久のことは俺に任せて、お前はそこで大人しくしている」
貴樹の落ちついた低い声が、ざわざわと波立つゆずるの心をすうと撫でていくように響いてきた。だから、静かに首を縦に動かし

た。

（疲れた……）
ゆつくりと上半身を、冷たい床に横たえる。

体が重い。

もう二度と立ち上がれない。

そんな気さえた。

本当に限界だった――。

（でも……帰ってきたんだ……）

ゆずるは一言一言を噛みしめるように、口の中でつぶやいた。

夢魔と対峙した時は、もうダメだと思った。

自分の死を意識した。

同時に、自分が死んでも優香だけは生きて帰してやりたいと思っ

た。
直久がいたから。直久なら自分に何かがあっても優香を連れて帰

ってくれると思った。

信じていた―――いつのまにか。

なんの力もない、タダビト無能の直久を頼りにしていた。
悔しいけれど。

いつの間にか、心の底から……信じていた。

きつと、和久もそれを見込んで、直久を連れていけと言ったのだ
ろう。

夢魔の興味は自分にだけ注がれ、直久は無視される。ノーマーク

な直久は自由がきくだろうし、バカじゃないから、優香や妖狼たちと一緒にだって、脱出方法を見出すはずだ。それに賭けたのだ。

そして、和久が賭けに負けたことはない。彼には一族の誰よりも鋭い“カン”がある。そもそも『先詠』神社の跡取り息子と勝負しようという輩はまず居ない。

だが、ひとつ和久にも誤算があったようだ。

確かに、直久はバカではなかった。バカではなくて、地上最強の大バカだったのだ。

（たく……何てやつだ。心臓を一突きするなんて、大バカ以外の何者でもない。貴樹兄さんが居てくれたからいいものの。別件で手が離せなかったら、今頃とつくにあの世に行ってるぞ……）

こみ上げる苛立ちに、舌打ちしたくなかったが、疲労でそれすらもままならない。

（……いや、待てよ）

それすらも和久の計算済みだったのだろか。よくよく考えてみれば、直久の傷を見てから貴樹を呼んだにしては、貴樹は事情を把握しすぎている。

つまり、和久はあらかじめ、直久が深手を負うことを想定して、

貴樹を優香の自宅に待機させていたに違いないのだ。

（……カズ……お前は……）

ゆずるは、ふうと小さく息を吐き、天井を仰ぎ見た。

全てを見越して、その命までも危険にさらして……当たり前のように自分を助ける従兄弟たち。

一人は、自分の命を投げ出し。

一人は、兄の命を差し出す。

自分は————生かされている。

一つ大きく息を吸った。

冷たい空気が肺を膨らませたとたん、消え去っていたはずの漠然

とした黒い不安が満ちてくる。

じわじわと、自分の体が闇と同化していくように、不安に塗りつぶされていく。

目頭が勝手に熱くなる。

(……結局……俺は誰も守れない)

自分は、妹一人、妖魔から救うこともできない。

それどころか、自分一人では、生きていくこともできない。

誰かに助けられ、誰かに守られ、誰かの命を犠牲にしてまでも――生かされていく。

(……後継者が聞いてあきれる……)

無力な自分が情けなかった。

そう思ったら、泉のように溢れてくる悔しさと一緒に、涙がこぼれそうになった。

必死に顔を上げて震える瞼を閉じ、弱音を飲み込む。飲み込めきれなくて、胸がつまる。うまく息ができない。

泣いたら負けるような気がした。

今、泣いたら、弱い自分に……逃げそうな気がした。

もっと力が欲しい。

誰も傷つけることのないような、強大な力が。

こんな今にも折れそうな心でなく、強い心が――。

「直久っ!？」

驚きの混じった貴樹の声で、ゆずるは我に返った。

あれほど鉛のように重たかった体を反射的に跳ね起こし、直久のもとへと詰め寄る。何事かと見れば、直久の傷は随分小さくなっていて、完治までもう少しというところだった。

(なんだ、治ってる……よかった)

貴樹が慌てた声を上げるから、直久の容態が悪化したのかと思ったのだ。すっかり顔色が良くなっているじゃないか。そう思って、

ほっと肩の力を抜いた時だった。

———クク……。

ゆずるの眉が詰められる。

今、直久が笑ったような気がした。

聞き間違えではない。直久の声だ。

息を潜めて直久の顔を覗き込むも、貴樹の治癒の甲斐あって痛みが引いたのだろう、穏やかに眠る直久がそこに居るだけだった。

「直？」

ゆずるは直久の肩を叩く。

その瞬間、冷や水をかけられたような激しい悪寒がゆずるの背中を駆けあがった。

（——！？）

何だ！？

何かがおかしい！！

そう思った瞬間、直久の口端がゆっくりと引き上げられ、不気味な笑みに変わった。

———ククク……。

ゆずるは、ざざっと飛び退き、身構えながら叫んだ。

「貴樹兄さん、離れて！！」

すごい剣幕で直久を睨みつけるゆずるの横顔から、貴樹は何かを察知したのだろう、すぐさま治癒をやめ、直久から目を離さないようにして、さっと後退した。

途端、貴樹の治癒光という光源を失った室内を暗闇が覆った。

いつだって闇は心まで黒く染めていく。

「お前は、誰だ」

ゆずるは、唸るように言った。

——ククク……。

ソレは直久の声で笑う。

もう、笑いが止まらないという顔で、大きく肩を震わせながら——笑う。

その仕草を射るように見つめながら、ゆずるは素早く脳を回転させる。

あれは直久ではない！

直久は直久なのだが、体をナニモノかが操っているのだ。すぐに、先ほど死闘を繰り広げた相手を思い浮かべた。

（夢魔か？ 追ってきたのか！？）

だが何かがひっかかる。

夢魔はあんな、高飛車な笑い方はしなかった。

では、いったい誰が！？

いつ、直久の体に入り込んだというのか！

「言え、誰だ！！」

全然気がつかなかった。

ずっと一緒にいたのに。

この次期当主たる自分が、直久の中で身を潜めていた妖魔に気がつかなかったっ！！

——ククク……この時を待っておったわ

“直久”は、そう言いながら流れるような動きで体を起こし、ゆずるたちに向き直った。そしてふわりと、宙に浮く。その間も気味の悪い笑みは消えない。

——この体、しばし借りるぞ

ソレが、直久の声でそう言い終えると——一瞬で姿を消した！
「なっ！！ 直っ！！」

思わず直久のいた場所へと駆け寄りそうになったゆずるを、大きな優しい手が止める。

「落ち着け、ゆずる。消えたわけじゃない、瞬間移動だ」

「追います！！」

「待て！」

慌てて瞬間移動をしようとしたゆずるを、貴樹が止めた。ゆずるの両肩に手を置いて、強い力で自分の方へゆずるの体を向かせる。

「落ち着け。相手が誰かもわからないのに、頭に血が昇りつめた状態で追いかけて、直久を助けられるのか？ 霊力だって残ってないだろう？」

いつになく雄弁な貴樹が、強い口調で続ける。一言一言、言い聞かせるように。

「しっかりしろ」

ゆずるはすうっと目をつぶった。そして、一つ大きく息を吸って、深く深く——吐く。

貴樹の言うことは、もっともだった。

自分に残された霊力はほとんどない。

自分が追いついたところで、直久を奪い返すことはできないだろう。

それどころか、今の自分には、この身を守る力すら残っていない。追いかけたところで、犬死にするだけかもしれない。

（それでも——）

再び瞼を開け、まっすぐに貴樹の顔を見上げた。優しい、深い色の瞳に、全ての不安が吸い込まれていくような不思議な感覚。

貴樹の治癒能力は、肉体だけではなく、心までも癒していく力を持っているのかもしれない。

「もう大丈夫です。落ちつきました。でも俺は、直久を追います。

貴樹兄さんは、お祖父様——当主に連絡を」

「追って、どうする気だ」

「俺は戦わない。当主がくるまで、なんとか引き延ばします。だから急いで事の次第を当主に伝えてください」

「どうやって引き延ばす。お前が食われるかもしれない」

「大丈夫」

ゆずるはまっすぐに貴樹を見据えた。

「直久は、この神社の敷地内にいる。感じるんです。結果から出られないのか、それとは別の理由があるのかわからないが、どちらにしても、敷地内にいる限り、勝算はある」

「……わかった。だが——……」

貴樹の大きな手が、ゆずるの頭を撫でた。

「お前が一人で戦う必要はない。一族全員をお前一人で守れるはずがないんだ。お前だけじゃない、それは当主も同じこと。いくら当主に強い力があっても、妖魔は掃いて捨てるほどいるんだ。手に負えるわけがない」

貴樹の表情はいつもと変わらない。でも、その瞳に宿す光は、どことなく優しく暖かみのある色に感じた。

「当主の役目は、皆を上手く使うこと。冷静に適材適所を見極めることだ。わかるか？」

ゆずるの中で何かが波紋のように、重なり合って広がっていく。

（一人で……戦う必要はない……）

本当に？

俺は、無力でもいいのか？

みんなを守る力をもつてなくてもいいのか？

（……皆を上手く使えばいい……）

口の中で貴樹の言葉を、何度も反芻する。そうするうちに、ゆず

るの心に、長い間ずっと押し掛かっていた深い闇色の重しが、コト
ン、と微かな音を立てて、動いたような気がした。 ゆずるは、す
っと顔を上げる。その瞳が、黒々と光り輝きはじめた。

「行きます！」

静かに頭を縦に動かす貴樹を残し、ゆずるは直久の気配を追って
瞬間移動した。

探しモノは何ですか（2）



ゆずるがたどり着いたのは、見覚えのある場所だった。

「ここは……奥宮か」

朝霧神社の本堂より、さらに奥にある禁足地。木々で隠された奥宮の境内だ。

「おや、もう追いつかれたか。さすがに早いもう」

ゆずるは、目の前の“直久”を睨みつける。

「しかし、すぐにこの体は返すと言うたではないか。心配性じゃのう。そんなにこの体が大事かえ？」

妖魔は、実におかしそうに直久の声で、直久の顔で笑う。だが、不思議なもので、まったく直久に見えない。和久とも違う。同じ顔、同じ声の別人がしゃべっているようにしか思えない。

（どうして妖魔がここに？）

ますます、直久の体の中にいる妖魔の正体がわからない。また、その意図も皆目見当がつかない。

だが、ゆずるたちにとっては好都合。

この奥宮は、ゆずるたち一族の聖地と言わなければならない。力を爆発的に強める触媒であり、霊力を増大させ、あるいは、回復させる機能も持ち合わせる。

すでにゆずるは、この場にたどり着いた時から、ジワジワと霊力が回復していくのを肌で感じていた。

とにかく今は、時間を稼いで当主である祖父の到着を待つ。その間に、ゆずる自身も霊力がある程度回復できるはずだ。そう、ゆずるは心を決めた。

「ここに何の用だ」

「そうよのう。探しモノじゃ」

「探しモノ？　こんなところにか？」

ゆずるは眉を寄せる。

この奥宮は、昔の本堂。つまり、ここには、九堂家の一代目、小夜を祀った社しかない。

妖魔がこの社に、何を探しに来たと言うのか。

ゆずる自身、当主の許し無く、この社には近づくと言われて育ったので、社の中に何が祀られているのか知らされていない。そもそも、何か形あるものが安置されているのだろうか？

「そうじゃ。ずっと探していたのよ。ずっとずっと。――まさかこんな所にあるとは思ひもしなんだ」

妖魔は、社を振り返り、ふわりと笑った。その笑顔に、ゆずるは違和感を覚えた。

(……?)

その笑顔は、たしかに嬉しそうだった。だが、その目の奥には、明らかにそれとは別の暖かさが含まれている。決して直久が見せることのないその表情に、なぜかゆずるは自分の胸がチクリと痛むのを感じた。

いったい、何を探しているのだろう。

そんな優しい笑顔で、切なそうな瞳で――何を手に入れようとしているのだろう。

ゆずるが生まれて初めて社の中に興味を持った瞬間だった。

同時に、本当に少しの間だけ、直久の体を借りるだけのつもりだという、妖魔の言葉が嘘ではないような気がしてきた。

不意に風が吹いて、直久の短髪を揺らす。と、微かな甘い香りがあった。直久の中にいる妖魔が放つ霊力の香りだ。

何かがゆずるの記憶の断片に引っかかる。

(この香り……)

おそらく花の香りだ。そして、以前どこかで“感じた”ことがある。

「お前……どつかで？」

「ふふふ」

妖魔は、いよいよ面白くなってきたというように、笑って見せた。「そなたたちから、小夜の臭いがした。だから、あの時、この者にちよいと細工をしておいたのよ。そうしておいて、春が来るのを待った」

（あの時？　――やはり、一度、出会ったことがある妖魔か？）

ゆずるは必死に記憶をたどる。

「やっと春が来たと、喜び勇んでこの者の気配を追ってここまで来たはものの、この地には強力な結界が張ってあつてのう。入ることは愚か、触ることもできなんだ」

「……それで直を憑代に^{よりしろ}」

「そうじゃ。この者は結界の中に入れる。だが、隙だらけじゃ。実に、使いやすい」

クックククと笑い声をたて、妖魔は続けた。

「だがのう、こやつには、いつもいつも弟が目を光らせ、実に巧く“守って”おるで。う。一人になるのを、ずっと待っておった」

「そうしたら、運よく、直は意識を失ったまま、俺に結界の中へと運ばれてきた。何も知らない俺たちは、直の体を治癒した。回復した直の体を、お前がまんまと乗っ取ったというわけか」

言いながらゆずるは、思案する。

冬の間は息をひそめ。

春に力が回復するのを待って、ことを起こした。

自分を含め、一族に気づかれることなく、やり過ごせるほどの力をもった妖魔。

さらに、妖魔は“あの時”と言った。

直久が自分と一緒にいた時に、出会った妖魔。

自分が直久と一緒に行動することは、ほとんどない。すぐに思い当たるのは、つい最近のこと。

雪深き山里で、悪霊退治の依頼を受けた。その時は、確かに直久

が同行していた。

(なるほど……)

ゆずるの脳裏に、その条件に該当する妖魔、いや、神の顔が思い出される。

「クックク……。ほんに、お前さんは賢いのう」

「山神か？」

返事をする代わりに、山神は笑う。

「あの寒椿の雪山に封印されていた、山神だな」

山神は、相変わらず面白そうに笑っている。それをゆずるは肯定ととった。

「そうまでして、探しているものは何だ？」

「預けていたモノを返してもらいにきたのよ」

「預けていた？」

「小夜にのう」

(小夜に!?)

千年以上も前貸し借りに、直久が巻き込まれてるというのか。

少しだけ、直久に同情の念が湧いたが、日ごろの行いが悪いからだ、とすぐにそれを一蹴する。

相手が特定できたということもあり、いつのまにか、ゆずるに表情が戻ってきていた。

「ならば、それが見つかれば、大人しく直の体を返すか？」

「ほう？　そなたが探してくれるというのか？　それはありがたいのう。あの社の結界は、なぜかこの者も入ることができそうになくて、困っておったところじゃ」

山神は小さな社を指さして肩をすくめて見せた。

「探しモノを手に入れたら、直の体から出て行くと約束しろ」

「初めからそう言ってるではないか。体は返すと」

「……分かった。あの社の中にあるんだな？」

山神の言葉を待つことなく、ゆずるは体の向きを社の方に向けた。この社には、一歩も近づいてはいけない。そう言われて育った。

この中に何があるのか。何を祀っているのか、正確なことは知らない。

だが、聖地たるこの地に、自分たちの生命を脅かすものが安置されているとは思えない。

（きっと――今より悪くなることは無いはずだ）

ゆずるは、パンツと胸の前で手を合わせ、呪文を唱えた。そして、自分の体の周りに薄い結界を張る。社に張り巡らされてた結界をすり抜けるためだ。

そのまま社に近づき、社の木戸に手を伸ばすと、一気に引き開いた。

「だめだっ、ゆずるっ!!」

祖父の声がした気がした。

その瞬間、ゆずるの脇をすり抜けて、社の中に手を伸ばす直久の姿が、残像のように見えた。

（――!）

山神に何かを奪われた。がばりと体を反転させ、振り返った。

一秒後、大きな破裂音があたりを引き裂く。間髪いれずに、社からすさまじい量の空気が流れ出す。

（結界が――）

戸を開けたことで自分が社の結界を壊してしまった。そう思った。耳元を通り過ぎる風がゴウゴウと啼く。

目が開けられないほどの、風圧を全身に感じ、よろめくように二歩後退させられる。

――おお、有ったぞ。これじゃこれじゃ……。

山神が手の中の何かを、大切そうに眺め、呟いたと思えば、ずっと直久の体から抜け出ていった。

天高く昇って行く山神の姿を目で追っていると、直久の体が、ぐらりと揺れたのが目の端に映った。

「直っ！」

その場で崩れ落ちる直久の体を、慌てて抱きとめる。

「ゆずる！ その場から離れろ！！」

再び祖父の声がした。最初に祖父の声を聞いてから、数秒しか経っていないというのに、ひどく長い時間が過ぎたように感じる。

暴風は、止まる気配はおろか、強まる一方だ。

舞い上がる土埃や落ち葉が、刃のようになって襲ってくる。目が開けていられない。

「お祖父様ーっ！！」

なんとか薄め目を開けて声の主を探した。

「ゆずる、早くこっちへ来いっ！！」

祖父はそう言いながら、自分の周りに強力な結果を張った。その結界の中にゆずるたちも逃げ込めと言うのだ。

だが、直久の体は意外と重く、思うように動けない。

仕方なく、瞬間移動を試みる。

「――！！」

出来ない！！

なぜだ、瞬間移動が出来ない！！

探しモノは何ですか（3）

「何をしている、早くしろっ!!」

祖父の声に焦りが滲む。

仕方なくゆずるは、ズルズルと直久の体を引きずりながら祖父の元へ一歩一歩、歩み寄っていく。

いったい何が起きているのだ。

山神に騙されたのだろうか？

いや、それとは種類も桁も違う妖気があの社から吹き出している。

何だ。

何なんだ。

全神経がぞわぞわ波立つように、危険を告げる。

何か嫌なものが近付いてくる。

逃げろ。

早く逃げろ。

そう全身が告げている。

ゆずるは、必死に足を前に進めた。

早く！

祖父の元へ!!

一歩。

また一歩。

祖父がこちらに伸ばす手が大きくなる。
自分も祖父に手を伸ばす。

もう少し――。

あと数センチ――。

祖父のシワくちなな手に、自分の手が届きそうになった時だった。

――ウオオオオオオオオオオ……。

「――！！」

ゆずるは思わず息を飲んだ。

突如、心臓が大きく脈打つ。

どくん。

どくん。

体中の毛が逆立つような、恐怖が押し寄せる。

心臓が体から飛び出してしまいそうなほど、音を立てる。

どくん。

どくん。

「くそう。何と言うことだ」

祖父が呆然として動けなくなったゆずるの腕をкаろうじて掴み取り、無理やり二人を結界の中に引きずり込んだ。転がり込むように、地面に膝をつきながら祖父の足元に座り込んでも尚、激しい動悸は収まらない。

――ウオオオオオオオオオオ……。

まるで地鳴りのような。

地の底から唸るような。

再び、聞こえたその呻くような声に、ゆずるは身を縮める。

何かが。

何かが自分を喰らおうと、啼いている。

何者かの感情がゆずるの心を浸食していく。

悲しみ。

苦しみ。

痛み。

嫌悪。

憎悪。憎悪。憎悪。憎悪。

「ゆずる、心を強く持て!! 心を食われるぞっ!!」

祖父の声も、もうゆずるには届かない。

ガタガタと全身が震え、完全に恐怖に支配されたゆずるには、何も聞こえない。

何も見えていない。

「ゆずるっ!! しっかりしろっ!!」

もう、ゆずるの目は“今”を映していない――。



――『直久と和久。お前はどっちがいい?』

そうだ。

思い出した。

こんなことが前にもあったのを。

この恐ろしい呻き声を、自分は前にも聞いた。

いつだ？

最近じゃない。

ずっと昔。

子供の頃だ。

あの時、双子と遊んでいた自分が、この奥宮に迷い込んだ。
封印を解いたのは自分だった。

異変を感じた祖父が、慌てて飛んできて、言ったんだ。

――『直久と和久。どちらにするか、お前が選べ』



「うわああああーっ！！！！！！」

突然泣き叫ぶ孫を見て、当主はちつと舌打ちをした。

どうやら、ヤツの術にハマったらしい。

相手の心の綻びにするすると侵入し、恐怖や憎悪を増大させ、心を壊す。

心を喰らう妖魔。心が空っぽになったヒト、発狂し泣き叫ぶヒト、その血肉をゆっくりと喰らう。

どんなに肉体を鍛えたとしても、何か一つは心に弱さを持つもの

だ。弱さを捨てられないヒトという生き物にとって、これ以上手ごわい相手はいない。

「くそう、ワシだけじゃ、手に負えん。ゆり、ゆり!!」

当主の声に答え、直ぐにゆずるの母がその場に姿を現した。

「これは……」

ゆりが呆然となるのも無理は無い。社の結界は破壊され、自分の子は泣き叫んでいるのだ。

「ワシ一人では、もうこの社に結界を張ることはできん。手伝ってくれ」

ゆりは、何も聞かない。

何も言わない。

ただ、静かに頷いた。

だから、当主もいつも彼女に甘えてしまう。

「頼んだぞ」

当主は目を閉じ呪文を唱え始めた。それに続き、一族でも指折りの結界師であるゆりも、すぐさま結界を作り始めた。

————ウオオオオオオオオオ……。

怒りにも似た、うめき声。

悲しみに満ちた、鳴き声。

主を失った、絶望の淵から救いを求める声。

（お前は……いつまでそうしているつもりだ……）

額に汗をかきながら、当主は心の中で妖魔に問いかけた。

ほどなく。

風は収まり、奥宮に静寂が戻ってきた。

当主は、ふうと息をつくど、ゆりを振り返った。ゆりは額の汗を拭いながら、こちらに微笑みかけてくる。

「助かったぞ」

「やっとお役にたてました」

「何を言う。お前には、いつも頭が上がらない」

今度は、ゆりは返事をせずにさびしそうに笑っただけだった。

「ゆずるは気絶してしまいましたね」

「ヤツに何か干渉されたようだ。可哀想に……。すまないが、直久とゆずるを貴樹の所へ連れてってやってくれ」

「……はい」

ゆりは何か言いたそうに、こちらを見ている。だが、自分からは口を開かない。そういう女性だ。

「大丈夫じゃ。お前のおかげで、強力な結界が張れた。もうしばらくは大丈夫だろう」

「ですが……」

「なあに、心配はいらん。今回は、直久が結界に近づいたために、壊れてしまったただけだ。私に何かあったわけではないぞ」

「ならいいのですが」

「だが、次に何かあった時は、お前に頼みたい。ゆずるだけでは、まだ無理だ。ヤツを封印することは出来ないだろうよ」

「お義父さま！」

真っ青な顔をするゆりに、当主は笑った。

まだ、自分の身を案じてくれるのか。

こんなにひどい仕打ちをしたというのに。まだ、自分を慕ってくれるのか。

「まだ父と呼んでくれるなら、うん、と言ってくれないか？ 私の可愛い孫たちのために」

「……わかりました。ですが、それはまだ先のことだと誓ってください。まだまだ、お元気でしてもらわなくては困ります」

「分かっておる。そう、簡単にくたばってたまるか」

からから、と当主が笑ってみせたので、やっとゆりに笑顔が戻った。

「さあ、行け」

ゆりは頷き、孫たちを連れて、その場から消えた。

ただ一人残された当主、九堂圭一郎は、しばらくの間、黙って社を見つめていた。

エピローグ

エピローグ

「やっぱりお前か」

直久は、深々とため息をついた。

「なんじゃ、嬉しくないのか？」

「嬉しいわけないだろう！　なんだこれは！！」

直久は、B5サイズの和紙を男に突き出した。そこには『裏庭にて待つ』の文字。

それを見た山神はカラカラと笑った。

「前は喜んでおったではないか」

「うるさいっ！！　てか、こんなもんで、俺の体に入れると思ってたのかよ」

意識を取り戻した直久は、全てを和久から聞いていた。

自分の胸を刺したために、瀕死の状態であったこと。

それを貴樹が治癒するために、慌てて本家まで運ばれたこと。

そしたら、体の中に入っていた山神が体に乗っ取って、“本殿の祭壇から”何かを盗んで消えたということ。

「実際、お主もここに來ておるではないか？」

「やかましいっ！！」

今日もなぜか、学校の机の中に、例の手紙が入っていたので、仕方なく来てやっただけだ。それに、聞きたいこと、言ってやりたいことが山ほどある。

「だいたい！　いつから俺の体にいたんだよ」

「お主があゝの結界から、歩いて出てくるのを見た時じゃ」

「俺が本家の結界から？」

ほとんど本家に近寄らない直久が、先日、確かに一度だけ自分の足で、あの黒鳥居をくぐった。本家の書庫に呼ばれて、夢魔について調べたあの時だ。

だが、帰りは和久に瞬間移動で優香の家に強制的に連れていかれたので、結界から歩いてたわけじゃない。

（待てよ……そうか！ ラベンダーだ！）

確かにあの時、自分は芳香剤を買いに、一度だけ、結界の境界である黒鳥居から外へ出た。

それに、黒鳥居をくぐった時に、違和感を覚えたような気がしないでもない。

「あの時か！」

「そうじゃ、それじゃよ。クッククック」

「そうじゃ、それじゃよ、じゃねーよ！ 何、勝手に人の体に入り込んでやる」

「ほんの僅かな間だけではないか。固いことを申すな」

「てことは、お前のせいか！！」

「何のことじゃ？」

「お前が中に居たから、玄関でビビビっとかバチっとか！！」

直久はギロリと山神を睨むと、さも納得という顔で、深く頷いた。だが、直久は気が付いていない。本家の玄関で結界に拒まれたのは、山神が体内に入り込む前のこと。だから、山神がきよとんとするのは無理もない。

「なるほどな。やっぱり俺は、可愛い孫だったってわけだ。よかったあ。——それで、お前は何を盗んで帰ったんだ？」

「盗むとは聞き捨てならぬ。返してもらっただけよ」

「だから、何を？ 俺には聞く権利があるだろう？ 勝手にヒトの体を使っておいて、説明もなしなんて、下等な妖怪がやることだぜ」
校舎の裏庭にある、大きな銀杏の木を背もたれにして、直久は腕

を組みながら、さも偉そうに言った。が、すぐさま心の中で舌を出す。

（――実際、下等な妖怪の振る舞いなんて知らないけどな）

だが、山神は意外にも、直久の言葉に心を動かされたようだ。

「それもそうじゃな。――これじゃよ」

山神が両手で包みこむようにして、何かを見せてくれた。

「ん？ 種か？」

親指の先ほどの大きさの、植物の種だった。

「何の種だ？」

「あのお方の種じゃよ」

山神は、意外なほど優しく微笑んだ。

「あのお方？」

「私のいた山には、それは美しい桃の木があったのじゃ。私は毎日、彼女との逢瀬を楽しんでいた。ある時、人間が山の全ての木を切ってしまった」

山神の顔が曇る。

「――私は、彼女を探した。幾度も幾度も、何日も探した。やっとこの種を見つけた。彼女は種の中で眠りにについているのじゃよ」

「今も寝ているのか？」

「うむ。こうしていると、彼女の寝息が聞こえてくるぞ」

聞いてみるか？ と山神が種をこちらに差し出した。

直久は受け取って右耳に種を当ててみたものの、何も聞こえてこない。

「だめだ、俺にはわかんねえ」

「そうか。残念だのう」

再び種を手にした山神は、本当に大切そうに種を見つめている。

（好きなんだな……その彼女のことが）

直久は、山神の想いが伝染したように、自分の心まで温かくなってくるような気がした。不思議とこっちまで笑顔になってくる。

「良かったな、見つかった」

山神は、本当に、嬉しそうに笑った。

「でも、なんで朝霧神社にあっただんだ？」

「あの娘じゃ」

「娘？」

「小夜じゃよ」

「はっ!？」

「小夜が、ワシと約束をしたのじゃ」

「待って待って。じゃあ、今のは平安時代の話か？」

「へいあんじだい？」

「つまり小夜の生きてた時のことだろう？」

「そうじゃ。小夜が、この種を植え、育ててくれると言ったのじゃ。そうすれば彼女は目を覚ます、と。だから小夜に種を預けた」

「まじかつ!　でも、種がここにあるってことは……」

「いかにも。小夜はそれっきり、忽然と姿を消してしまった。理由は分からぬ。私は必死になって探した。探し続けた。そうこうしている間に、あの山に封印されてしまった」

「いやいや、ただ探してただけじゃ、封印されないだろう。お前、何したんだ」

「クックク。――そなたも、なかなかどうして、聡いもう」

「誤魔化すな!　暴れたんだろう？」

「覚えておらん。だいぶ、前後不覚に陥っていたようじゃ。封印されるまでの記憶も、封印されてからの記憶もないのじゃ。あるのは、そなたたちに出会ったあの時のことじゃのう」

つまり、そうとう暴れたんだな、と直久は顔をヒクつかせた。

「でも、おかげでこうして彼女と再会することができた。礼を申そう」

「そうかよ。それはよかったよかった」

そう言ってから、直久は山神に向き直った。

「でもさ、それで本当にいいのか？」

「うむ？」

「だってさ、彼女に会えてくない？」

山神は、はっとしたように押し黙り、種に目を落とした。

「俺が植えてやるよ。その種、育ててやるよ」

目を見開いたまま、山神は何も言わない。

「まだまだ、何年も先かもしれないけどさ。彼女がまた笑ってる姿、見たいだろう？」

男なら誰だって、そう思うはずだ。

大切な人の笑顔を守りたい。

愛しい人には笑っていてほしい。

きつと、それは、妖怪だって神様だって、一緒じゃないのか？

直久は、そう語りかけるように、にっと笑って見せた。

「ほら、かしてみろよ」

差し出された手の平をじっと見つめたまま動かない山神に、直久はぷつと吹き出した。

「わかったよ。その代り条件を付けよう」

「取引かえ？」

「そうだ」

無条件で信じて、また裏切られるのが怖いのだろう。交換条件ならば、山神も種を自分に託しやすいと思ったのだ。

「条件を言うてみよ」

「お前の名前を教えてくれ。せつかくこうして話しをしているのに、その相手の名も知らないなんておかしいだろう？」

山神は驚いたように、目を見開いた。

「何だよ、そんなに驚くことかよ？」

「……名……？」

「そうだ。お前も俺の名前を呼べばいい。俺は直久だ。お前の名前も教えてくれ」

「そなた……意味が分かって、言っておるのか？」

「は？」

きょとんとした直久に、今度は山神の方が、ぷつと吹き出した。

「いいだろう。その取引に応じよう」

山神は、クックククと笑いながら種を差し出した。

直久はそれを受け取りながら、わけがわからんと、眉をしかめる。
「直久。これからはそう呼ぶでしょうかのう」

「おうよ、呼んでくれ、呼んでくれ」

その時、遠くから直久を呼ぶ、聞きなれた声がした。その声の方を向くと、不機嫌そうな顔のゆずると、満面の笑みを浮かべてこちらに手をふる弟の姿が見えた。

「なんだ、ゆずるのやつ、また何か怒ってるぞ」

「おっと、私は失礼するでしょうかのう。どうもあの娘は好かぬ」
間髪いれずに、直久の眉間に皺が寄る。

今、何か不思議なワードが聞こえたが、気のせいかな？

直久はゆっくりと山神を振り返った。

ぱちくりと瞬きをして、首を傾げる。

「娘？ 今、娘って言ったか？」

「うむ」

「誰が？」

「あれじゃ」

山神はまっすぐ指をさす。その指の先にいるのは――どう見ても、何度、目を擦って見直してみても、ゆずるだ。

「……はっはっは」

「何がおかしいのじゃ？」

「いや、夢魔といい、アンタといい、強い奴らは冗談がヘタなんだなあと思っ」

今度は眉をひそめたのは、山神の方だった。

「私が冗談を言って、何の得がある？」

「え？」

「まあ良い。私には、なぜあの娘を、直久が男だと思っているのか分からぬが、あの娘と鉢合わせするのは御免こうむる。失礼するぞ」

「……………え？ え？ え？」

山神は、ふわりと空高く舞い上がって行って、風に乗った。だんだんとその姿が薄くなつて空気に溶けていくのを、直久は、ただただ、ぼーっと目で追った。

———そうじゃ。私の名は萌葱^{もえぎ}。彼女が目を覚ますまで、この名を直久に預けよう。

そんな山神の声が、春風に乗って直久の元へ届けられたのと同様に、直久の絶叫があたりに響き渡ったのは言うまでも無い。

兄の絶叫を聞いた和久は、何事かと慌てて兄の元へと走り寄った。「どうしたの!？」

まるでコイのように口をパクパクさせてこちらを振り返る直久。遅れてゆずるも、直久の元へと到着すると、なぜか兄はゆずるばかりを穴があくほど凝視している。

「いや、あの、ええ? だってさ?」

「日本語も忘れたのか?」

ゆずるが、面倒くさそうに言った。

「山神様と話してたんでしょ? なんだって?」

「……種預かった」

直久はゆずるから目を離すことなく、和久の問いに、ぼつんと答

える。

明らかにおかしい。

「種？ 何の？」

「アイツの彼女」

「彼女？」

「これ、育てる約束したんだ……それと、名前」

「名前？」

「アイツの名前を覚えてもらった」

「えっ!？」

和久とゆずるは、同時にその言葉に反応した。

「名前、教えてくれたの!？」

「ああ。えっと確か――」

「駄目っ!!」

和久の制止に、直久はぎよつとする。

「名は、簡単に告げてはいけないんだ。人とちがって、妖怪や神と名を交わすのは、契約を意味するんだよ」

「契約？」

「式神になったということだ」

ゆずるが言った。

「なっ……」

何だって!？ そう言おうとしたのだろう。直久は驚きに言葉を失っているようだった。

それもそのはず。

知らない間に、兄は山神を、自分の式神にしてしまったのだから。「これから、直ちゃんが山神の名前を呼べば、山神は現れる。ただし、山神の気分にもよるんだけどね。気分がいい時に、助けを呼べは、ちゃんと助けに来てくれるはずだよ」

「マジか……」

信じられない。そういう顔だ。

「ははは。直ちゃん、すごいね！ 僕もびっくりだよ」

「……お前には勿体ないな、山神ほどの式神とは。使いこなせるとは思えん」

「おまつ……」

ゆずるの憎まれ口に、何かを言いかけて、その言葉を飲み込み、直久は口を閉ざした。

（あれ？）

まだ何かある。和久は直感した。

「直ちゃん？」

直久は、じっとゆずるを見つめてから、口を開きかけ、やっぱりやめたというように、小さく息を吐く。

「ゆずるがどうかしたの？」

直久がぎくりと反応する。

「何だ。言え」

ゆずるが苛立ちをあらわにする。

「……その……山神がな……変なこと言ってる」

「早く言え」

しばし、迷ったように直久の視線が揺れた。だが、キッと顔を上げてまっすぐにゆずるを見た。

「お前、女なのか？」

和久とゆずるは、同時に目を見開いた。

山神の仕業か。

和久は慌てて説明しようと口を開きかけたが、それをゆずるが制止する。

「そうだ。俺は女だ」

直久が大きく息を飲む。

そんなまさか。嘘だ！

そんな兄の心の声が聞こえてくるようだった。

「俺は、男として育てられた。だから、これからも男として生きていく」

「……嘘だろう？」

救いを求めるように、兄がこちらを見ている。和久は、黙って頷いた。

「九堂家に必要なのは女子じゃない。後を継ぐことのできる男子だから、俺は本家の後継者として、生まれた時から男児として育てられた」

ゆずるは淡々と告げる。

ゆずるが生まれた時、すでに現当主、九堂圭一郎の息子は出奔した後だった。ゆずる以外に、圭一郎の後を告げる者がいない。だから、圭一郎は誕生した子を男児と公表し、ゆずるを後継者として育ててきた。

ゆずるが女兒であることを知る者は、一族でも数えるほどしかない。本家の祖父母、ゆずるの母、和久の両親、そして姉夫婦。……そう、和久たちの家族は、兄以外、その事実を知っていた。

「お前、知ってたのか？」

兄が険しい表情で、こちらを見た。

「僕は、いつだったか……気づいてしまったんだ。誰かに聞いたわけじゃないよ」

「知ってて黙ってたんだな」

「だって、僕もゆずるの口から聞いたわけでもないのに、僕の口からそんなデリケートなことバラせると思う？」

何かを言おうとした直久から、ゆずるは目を逸らし、その言葉を封じた。

「俺が女だと、お前に何か迷惑をかけるのか？」

和久ははっとしてゆずるを見た。その表情に苦悶の色が滲んでいる。

「俺が女であろうと、男であろうと、お前には関係のないことだろう。それを、なぜわざわざ報告しなきゃいけない？」

「……ゆずる。もういい。直ちゃんは、ただ、驚いただけだから」

「カズは黙ってる」

冷たい矢のような瞳で、ギロリと睨まれた。仕方なく、和久は言

葉を飲み込む。

再びゆずるは直久に向き直った。

「お前が、もう俺を男として見られないと言うのなら、金輪際、俺の前に姿を現すな。本家への出入りも禁じる。祭儀にも出席するな」

「なっ……」

「ゆずるっ!!」

ゆずるは二人に背を向け、もと来た道を歩き始めた。

遠ざかる小さな背中に、直久が動揺したように和久に助けを求めてくる。

ゆずるの考えていることは分かる。

女である自分を一番受け入れられないのは、ゆずる自身だ。

なぜ自分は男として生まれてこなかったのか、そう思って何度も涙しているはずだ。

直久も、女である自分を否定するのか。

女に生まれてきてしまった自分を否定するのか。

そうやって、自分を責めているのだ。

女として生まれてきたのは、ゆずるのせいではないのに……。

だけど、違う。

兄はただ、驚いてるだけなんだ。

男だと思ってずっと接してきた人物が、女だったなんて言われたら、驚くのは当然だ。すんなり受け入れられないのが普通というものだ。

和久は、深くため息をついた。

「大丈夫。いつも通りに接してよ。そうすれば、ゆずるの機嫌は直るから」

怖いだけなのだ。

自分が受け入れられないことが。

脅えているだけなのだ。

直久の態度が変わってしまうのではないかと。

（僕には、どう見ても女の子にしか見えないけどね……）

ふっ、と和久は笑顔になった。

「ほら、追いかけて、直ちゃん。ほらほら」
シッシ、と追い払うように、手を振った。

不安そうな顔で、何度かこちらを振り返りながらも、渋々、兄は
ゆずるの後ろを足早に追っていた。

兄とゆずるの姿が豆粒ほどのサイズ見えるようになった時、和久
はすっと笑顔を消し去った。

そして振り向かず、どんな炎も凍りつきそうな冷たい声を吐き
捨てた。

「それでも隠れているつもりか？　そこにいるのは分かってる。出
てこい——夢魔」

『うひゃひゃひゃひゃ。見つかったのかあ、残念だなあ。本
当にボクはドジだよ。あんなにいい器はないっていうのに、気がつ
かなかったなんて』

「兄の体を狙ってるなら諦めろ」

和久は首だけを少し動かし、背後にいるソレを射抜くように見や
る。

《兄ニ 手ヲ ダスナ》

声ではない《声》が、あたりを静寂に誘う。あたりの草木さえも
が、息を飲んだように、音が消えた。

空気が、時間が、何もかもが凍りついたように動きを止める。
ソレも、まるで雷に打たれたように動けなくなっていた。

「まさか……君もあの子と同じ術を……!?!」

和久は答える代わりに口端を引き上げた。

《二度ト オレノ 前ニ 現レルナ》

「……」

いつのまにか戻ってきた木々くの葉音が妖しく鳴き、和久の顔に葉陰が落ちる。

ソレは数秒黙って和久を見つめていたが、おもむろに体を回転させ和久に背を向けた。

『ボクはまた来る。ボクは君よりずっと長生きだから、ね』

そういいながら、だんだんと薄くなつて消えていくソレを、和久は最後まで見送ると、ふっと笑った。

「オレの娘が、お前を殺しに行くから首洗って待ってろ」

それだけ言うと、和久は兄やゆずるところへと、かけ戻って行った。その顔はいつもの暖かな笑顔に戻っていた。

——それは楽しみだ。うん、楽しみだなあ〜！ ……待ってるよ、ずっと、ボクは……待ってるよ。うひゃひゃひゃひゃ……。

完

シリーズは『蚩狩り』に続く

あとがき

ちょっと！ガス君が、“俺”って言ったよ！！どーゆーこと！？

というわけで、春眠が完結いたしました。

上記のような心の叫びを読者様に呟いていただければ、本望です。

しかしながら、なんで夢魔がピエロなのか。そしてなぜ選曲が『ねこふんじゃった』なのか。中学生だったころの妹の想像力&妄想力は、実にぶっとなでいたのだなあと、素直に思います。

そのへんが、大人になってしまった私たちには、真似できない持ち味を作品にトッピングしてるのではないかと思ってます。

また、突っ込み満載の原作『春眠』も同サイトにて公開しておりますので、(<http://ncode.syosetu.com/n6626d/>)合わせてご報告いたします。こちらは、妹が中学生のときに執筆したもの、そのままになっています。

さて、今後も『九の末裔シリーズ』は『蚩狩り』へと続きます。『春眠』が起承転結の“起”とも言える作品ですので、物語はこれから盛り上がっていく予定です。まだまだ、序盤ですからっ！

奥宮の秘密、そしてゆずるの記憶、和久の腹黒説&最強説！？はたまた、ラブはいったいどこから湧いてくるのか。(おかしい。ラブファンタジーなのに…)

そして、私が気に入っちゃったがために、式神にされてた山神様の運命やいかに（笑）

勝ち気な美人好きな日向は、6才の天才児優香ちゃんの成長も気になるそうです。

妄想は膨らみますが、何せ時間がない。仕事の道中（最近、車通勤が多いけど）、入浴中、寝る前（そして寝落ち）等、時間を見つけて、徐々にリメイクしていくつもりです。今のところ続編『蜚狩り』の公開は未定です。もうしばらくお待ちください。

また、何度も名前が登場する九堂一族開祖『小夜』は、別シリーズ（将門記）の『災厄の姫君』にてお会いできる予定です。合わせてご覧頂けますと、幸いです。

率直なご意見、ご感想&レビュー、読了報告等、何かしら頂けますと、途端に執筆スピードが上昇しますので（笑）どしどし募集しております。よろしくお願い致します。

最後になりましたが、執筆の応援ありがとうございました！

201012014 日向あい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1840n/>

九の末裔 ～春眠～

2010年12月14日20時25分発行